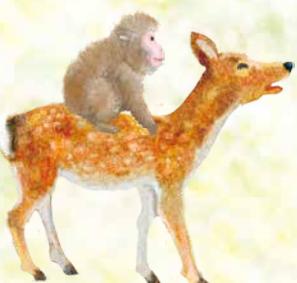


屋久島・奄美発 世界自然遺産

の 里と環境文化



奄美大島・ショチョガマ



鹿児島大学鹿児島環境学研究会
公益財団法人屋久島環境文化財団
屋久島里めぐり推進協議会
奄美・屋久島まち歩き連絡協議会



はじめに

鹿児島大学鹿児島環境学研究会では、2008 年の発足当初から、奄美の世界自然遺産登録を目指した課題解決や普及啓発に取り組んできました。奄美群島国立公園が指定された 2017 年からは自然と共に暮らしてきた奄美の環境文化をテーマに掲げたシンポジウムなどを開催してきました。

公益財団法人屋久島環境文化財団及び関係団体との共同・協力で作成したこの本では、2021 年 7 月に奄美・沖縄が世界自然遺産に登録され、さらに 1993 年 12 月に登録された屋久島が登録 30 周年を迎える機会をとらえ、両地域共通のキーワードである「環境文化」と、それを体験し学べるフィールドとしての里（集落）にスポットをあてました。

両地域がさらに連携して、魅力あふれる地域づくりや情報発信を進めいく手がかりとなれば幸いです。

目次

第1部	座談会 「屋久島・奄美の環境文化を考える」	2 - 8
第2部	屋久島・奄美 それぞれの環境文化	9 - 17
	森：ヤクスギの森・シイの森	10
	海：里海の恵み・黒潮の恵み	12
	酒：屋久島の焼酎・黒糖焼酎	14
	唄：屋久島古謡「まつばんだ」を後世に・奄美唄島プロジェクト	17
第3部	屋久島・奄美 環境文化の里をめぐる	18 - 54
	永田	19
	吉田	21
	一湊	23
	宮之浦	25
	楠川	27
	安房	29
	春牧	31
	平内	33
	中間	35
	本村(口永良部島)	37
	屋久島の地杉ブランド戦略	39
	大和村(国直)	41
	瀬戸内町(古仁屋)	43
	宇検村(湯湾)	45
	奄美市住用町(市)	47
	龍郷町(秋名)	49
	喜界町(阿伝)	51
	徳之島町(金見)	53



屋久島・奄美の環境文化を考える



世界遺産登録前から「屋久島環境文化村構想」を推進してきた屋久島。世界遺産登録に先立って誕生した奄美群島国立公園を「環境文化型国立公園」と位置づけた奄美。両地域の環境文化を比較することで、2つの世界自然遺産をもつ鹿児島の魅力を再確認し、両地域が連携した今後の発展、発信につなげたい。

そのことを考える契機として、2022年1月7日に、屋久島、奄美の環境文化に関わりの深い4名の方々に対談していただきました。

場所：奄美市立奄美博物館

コーディネーター：小栗有子・中村朋子（鹿児島大学鹿児島環境学研究会）

環境文化の成り立ち 屋久島・奄美を振り返る

小栗 今日はお集まりいただきありがとうございます。この本では、これから地域の自律的な発展を担う高校生ぐらいの次世代に向けて、地元の環境文化を深く知ってもらい、屋久島と奄美の新たな魅力や奥深さを発見してもらいたいと思っています。まず始めに、皆さんにとって環境文化とは何か、その実践とはどういうことなのか、それぞれのお考えをお話しください。

小野寺 僕が鹿児島県庁に来た平成2年（1990）の頃、「環境文化」という言葉は既にありました。鹿児島県総合基本計画に書かれた「屋久島環境文化村構想」を具体化するために鹿児島に呼ばれ、むしろ、環境文化の中身をつくることになった。知事が長期計画をつくるときは、まず分野に漏れがないように、また、空白の地域をつくらないようにバランスを考えます。当時はちょうどバブル期で、種子島にはゴルフ場、リゾートホテル、宇宙基地まであって、景気がいい。しかし、隣の屋久島には何もない。屋久島には何もないが、自然は素晴らしいらしい。それで、自然を活用した環境学習をやることにすれば空白を埋めることができる、というのが最初の発想だったとおもう。

その時に、環境文化という言葉がつくられ、長期計画に屋久島が環境文化村構想という形で入った。それは環境問題について、マイナ

スを取り除くだけではなく、地域づくりとか国づくりの主要な柱として、環境や自然があるという思いがあつてのことだったろう。数あるプロジェクトの中で、僕は直感的に「屋久島環境文化村構想」は、県境を超えるものになると思った。

日本人は江戸時代までは自然との向き合い方が情緒的、文学的で、自然を愛する民族だと言われてきたが、明治以降あっさりとそれを捨てた。特に開発が激しかった、高度経済成長期の大規模な自然破壊の時代を経て、生態学など自然科学的な側面からこれに歯止めをかけるという社会的要請が強くなった。しかしそれは反面で、自然と人間の暮らしとの多様な関係が細ってしまうことにもなった。その関係性をもう一度取り返さないとまずいという危機感がある。それが「環境文化」のテーマだ。

「環境文化とは決定的にこれだ」と言うほどの段階にはまだ至っていないと思う。自然と人間の関係を、歴史も含めたものとして丸ごと捉える、それを環境文化と呼ぼうというぐらいで、とりあえず仮置きしておく。そして一人ずつ違う自分の体験や経験を出し合う。こういう環境文化の内実を積み上げる作業をもう少し続けた方がいいと思う。

屋久島環境文化懇談会



環境文化はこれだと定義しなくてもいい
環境文化村構想を生んだのは、自然と人間の暮らしの関係性をもう一度取り返したいという前向きな思い
(小野寺)

そうそうたる文化人を集めたときも、結果がどう出るのかは分からなかった。ただ、彼らが学者として、世の中を変えなきやいけない、何かを遺したいと思っている時に、屋久島、環境文化というテーマが刺さったのではないか。

環境文化村構想、世界遺産登録の直接的な効果として、屋久島の観光客は激増した。しかし、非常に浅いかたちで地域が動き出してしまった。新しい理念に基づいて地域づくりをするという方向には至っていないのが現実だろう。

高梨 環境文化の概念をつくられるときに、あまり厳密な定義をしないでやろうとされたというのは、すごく興味深いです。

屋久島で環境文化村構想が始まった時、人文科学分野の中には環境文化という言葉に違和感を持つ人たちもけっこういました。環境という言葉自体も文化という意味を含んでいますから、「環境文化=文化+文化」というような感じの言葉になります。日本では、環境という言葉はイコール自然というイメージが強くて、アメリカなどでは、人間関係などいろいろな要素を含む言葉として理解されていると思うんです。

そういう混沌とした中で、環境文化型国立公園というのができた。

平成20年(2008)から、奄美市と伊仙町と宇検村と三つの自治体で、文化庁事業の「歴史文化基本構想」の策定をやりました。中山清美さんが中心でしたが、その時のメンバーだった小野寺さんが、奄美という場所は、自然環境と歴史環境を踏まえて、伝統的な人の暮らしが醸成されてきたいことを論じられて、それがまさに奄美群島の環境文化を的

確に捉えているなという実感がありました。

その後、遺跡と出土品がダブル国指文化財になっている小湊フワガネク遺跡の発掘調査に携わり、夜光貝交易を発見して、古代・中世の列島南縁の様子を描き出してきました。環境=自然として、自然と人との関わりだけから考えるのではなく、奄美群島が歩んできた歴史的環境もあわせて考えていかなければ、奄美群島の環境文化の特徴は理解することができません。だから、自然環境だけではなく、歴史的環境や生態学的環境等を含め、広い視座から環境を捉えていく必要があると考えるようになっていきました。

特に奄美群島、鹿児島県の環境文化論は、自然環境に適応して、その恩恵をいただく伝統的文化という理解論が強いと思いますが、もうすこし広く環境を理解した方がいいし、文化も伝統的なものばかりではなく、もっと幅広い人々の営みを含んで考えていくべきだと思います。産業についても、積極的に評価していくべきだと思います。

環境文化という言葉の定義よりも、やっぱり、島に住んでいる皆さんのが主役なわけだから。どうして、そんなに環境文化の定義が混乱するのか、自分にはよく分からない。

環境文化と生活 どう伝えていくのか

緒方 私は常々、「環境文化」というのは、生きていく上で当たり前のことだと思っているんです。自然と人間どちらも単体ではなく繋がっていることを、屋久島で暮らしているといつも感じています。

屋久島環境文化村構想を初めて読んだとき、その中に描かれている自然と人の営みが

小野寺 浩 (公財)屋久島環境文化財団理事長



札幌生まれ。1973年環境庁（当時）に入る。国立公園事務所等に勤務。1984年国土庁で四全総策定。1990年から3年間鹿児島県の課長、屋久島環境文化村構想、世界自然遺産登録を推進した。2002年環境省計画課長で新・生物多様性国家戦略策定。2005年自然環境局長を最後に退任。東大、鹿児島大の特任教授を経て現職。奄美の世界遺産登録にも係わる。

高梨 修 法政大学沖縄文化研究所国内研究員

1960年東京都国分寺市生まれ。元奄美市立奄美博物館館長。法政大学沖縄文化研究所国内研究員。専門分野は環境文化論、境界領域論、博物館学。奄美群島の博物館は、世界自然遺産観光に訪れる人たちだけではなく、島のみなさんにとって、シマ（集落）にアクセスできる場であり、「回想」を促す場となることを望みたい。



とても美しく感じました。私たち島民にとってずっと当たり前すぎて気付かなかつたんですが、自然、文化、経済など一見相容れないと感じるものが、実は全て繋がっていて、世界に誇れるものだったんだと感動しました。環境文化ってすごく有機的なもので、呼吸している生きものみたいなものだと思います。机上の空論でも既存の正論でもない、暮らしのなかで常にアップデートされているものだと思うんです。

屋久島は、山が深くて自然環境が厳しかったために人間優位にならずその結果自然が残っていたこともあると思います。日々猛威をふるう目の前の自然とうまく折り合いをつけながら生きていたということが「自然と人の共生と循環」ということになったんじゃないかな。

でもかつてはどんな地域でもそうだったんじゃないでしょうか。

屋久島環境文化村構想の環境文化という考えの中には、経済やインフラ、そういう人が営むもの、つくりだしていくもの、お金を生むことも含んでいる。それはどれも切り離すもののじやなくて、経済も人も自然も文化もいっしょに回っていこうよということだと感じています。

今、屋久島では幻の民謡と言われる「まつばんだ」という歌がムーブメントになっていて、私だけでなく、「歌い継ぎ隊」が発足されたり、夕方五時の時報になったりとか、島の中で途絶えそうになっていたものを残したいという動きが出てきて、まるで重たい臼が少しずつ回っていくように徐々に加速がついてきましたが、これも環境文化の一つだと感じています。

中村 修 NPO 法人 TAMASU 代表



1968年大島郡大和村生まれ。大和村役場勤務を経て2015年に特定非営利活動（NPO）法人TAMASUを設立。法人名は、奄美大島の方言で利益の共有と均等配分を意味する「たます分け」に由来する。奄美大島の自然と文化とコミュニティを守り、そこから生まれる利益を活用することによって持続可能な地域づくりを目指す。

中 村 自自分が思っていた環境文化は、自然から影響を受けた私たちの普通の暮らしで、暮らし自体が文化になっているということ。さっき緒方さんが「普通の暮らし」と言ったけれども、私たちが大切で影響で受けているのは、希少種でも何でもなくて普通の里山にある自然だと思います。奄美の山はシイがいちばんの優占種なので、シイの文化で、シイを利用した林業、農業、生活、暮らしが環境文化になっているのかなと、漠然とそういうふうに思っています。

この数年のムーブメントの中で、特に自分のシマに対して誇りを持つ若者たちが増えたと思います。地元の人たちが環境文化に気づかされて、

それが初めて醸成されてきたのかも知れない。昔の自分たちは、地元のそういった文化とか

興味もないし、大切なものだと思ったこともなかったんだけど、今は、最近の若い人たちの方が、そういった意識が高いなと感じています。

自分が最初に「TAMASU」の理念である「たます」という言葉を聞いたのは、追い込み漁に行った時で、漁で獲れた魚を人数プラス船の分プラス1で分ける「たます分け」というんですが、その平等な分け方がすごくシビアで、すごいなと思ったのがきっかけです。

でも、そこまでする一方で、その途中で通りかかってきた人にも「みだます」、「見てるたます」っていって、簡単に分け与えもするんですが。

TAMASU の仲間たちみんなとはいつも、

緒方 麗 レストランバー散歩亭・エッセイスト



屋久島生まれ屋久島育ち。安房河畔で「レストランバー散歩亭」を営みながら、MBCやくしまじかんWEBライター、ラジオ出演、エッセイストとして屋久島のことを発信している。また、幻の民謡と言われ、島内で50年間唄える人が途絶えていた「まつばんだ」を歌い、屋久杉ウクレレと島の映像とともにyoutubeで発信している。

「私たちが守っていく宝物はシマにある自然と文化とコミュニティだよね」っていう話をしています。その三つはシマに当たり前に残っている宝物で、そのシマの宝物を守ること、保全することが第一であって、それを活用して、それを生業としていく、経済につなげていきたいというのが、「たます分け」からのTAMASUの理念です。

緒 方 私から見て奄美の人ってすごくオープンだなと感じます。屋久島も人とのつながりや結束は強いんですけど、全島にわたってみんな仲良しというよりも、それぞれの集落の中で築かれる人間関係の方が重要で、ときにそれが閉塞感を生む事もあります。集落同士の交流ができにくい島の地形がそうさせているんだと思います。

中 村 奄美でも同じような閉塞感は強いですよ。例えば、各集落のことを揶揄する言葉があります。龍郷町戸口地区は、外洋に面して、漁労に携わる人が多い集落で、ついつい声が大きくなってしまう、オブラーントに包まずに、はっきりものを言う人が多いから「戸口野蛮」。反対に、大和村のいちばん奥の大和浜は、ちょっと上品ぶって丁寧にしているからと「大和浜懶懶」。その地域の環境に置かれた人に現れた特性を言い当てているこの言葉こそがまさに環境文化なんじゃないかなって思いますね。

緒 方 私は島の閉塞感が苦手で、12才の時にひとりで鹿児島市の中学校に出て行ったんですけど、大人になるにつれ、その閉塞感に戻りたくなる。中村さんの「たます分け」の話を聞いて、昔の自分だったら、もう、分けること自体が面倒くさい、時間がもったいないって思ったかもしれないけど、今は、「だからこそ自然が守られて、秩序が乱れないんだな」と思えます。自然や集落の人達と共に存しなければならない土地で育ち、それを不安定で野暮ったい生活だと感じていたはずなのに、今になって原風景に回帰していく自分が出てきたことに驚いています。

小 野 寺 だけど、都会なんて何もない、田舎のほうが人の心が温かくてずっといいという議論では絶対ダメだと思う。例えば、大和村のTAMASUで金儲けができる、豊かな生活もできて、どうだ！というふうに見せないと説得力がないと思う。

やっぱり地元出身の人がリーダーとして出てくるのが本物だと思う。屋久島ではなかなかそういう人が出てこないんだけど、奄美の方が可能性がありそうだと思う。

緒 方 確かに屋久島の人は、自分達の手でなんとか暮らしを豊かにしたいとの思いで立ち上がる人は少ない気がしています。それを私は、自然の勢いが強すぎるから、人間の「努力しよう」とする気持ちを奪ってしまっている面もあるんじゃないかと感じるんです。

環境文化とこれから

高 梨 鹿児島県二島（奄美大島、徳之島）、沖縄県二島（沖縄島北部、西表島）が世界自然遺産になりましたけど、この四島の「後ろに山、目の前にきれいなサンゴ礁の海があり、そこに人が暮らす環境がある」というロケーションは、普通の観光客から見たら非常によく似ていて、プロモーション映像を見ても、奄美と沖縄の区別がつきません。しかも、沖縄県の発信力が圧倒的に強い。例えば、タンカンの生産量はこれまで屋久島が日本一でしたが、今は奄美大島が日本一でしたが、インターネットで「タンカン」を調べると、ほぼ沖縄しか出てこない。沖縄では観光土産店でタンカンの加工食品が人気で、足りないタンカンは奄美大島から大量に沖縄に流れているわけです。



世界遺産の二島だけでなく、奄美群島の環境文化型国立公園のまとめが大事
(高梨)

でも、実態として奄美と沖縄はすごく違うと思っていますので、奄美の奄美たる部分を

もっときちんと出していくことが、まずは大事かなと思っています。

小野寺 奄美は、昭和30～40年代の擬似南国宮崎、指宿、昭和47年の沖縄返還で沖縄、バブル期の昭和60年代の海外リゾートという一連の観光ブームの流れの中で、常に空白地帯だった。そのために本土資本が観光資本も含めて、あまり入って来なかつた。これは沖縄との大きな違いになった。今となっては、むしろ大きな利点だろう。

中村 漁業での成功例をあげると、奄美漁協の笠利支所が沖縄のスーパー桑エーと相対取引の提携をして、仲買を通さず、獲った分の魚種をいくらで買いますというのを直でやっているんです。生き締めして、ファインバブルを通して、鮮度を保って沖縄に送れば、相対取引で必ず同じ値段でスーパーが買うので、漁師同士の情報交換がどんどん進んでいます。これまで人を出し抜いて、高い時に一番に売りたいっていうのがあったけど、今は、みんなでいいものを作ろうっていう競争だけになっています。

緒方 屋久島の漁業は、仲買との互助関係が強い反面、漁師が個人的にレストランに卸すことがなかなかできないとの声を耳にします。

小野寺 漁協も農協も同じ構造で、何十軒対何十軒という規模になれば、認めざるを得ない方向になってきていると思う。なかなか大変ではあるけど、そういうふうに経済の流れを作り、改善していくことが重要だ。

次世代へのメッセージ

緒方 私は屋久島の民謡を歌う活動も行っていますが、もしそれを「継承しなければならない」とか「後世に残さなければならない」などと強制されるような地域活動の一環であれば、継続できなかつたと思います。

なので、私は民謡をそのまま残すのではなく、自分の表現で歌っています。「変えよう」などと背負い込みすぎず、まずはこれ

環境文化村構想には、屋久島が営んできた当たり前のことがすべて書かれていた

環境文化は、経済・人・自然・文化が一緒に回って、止まらずに息づいているもの（緒方）



まで自分が見てきた景色や、感じてきた心を大切に、自信を持って自分を表現するだけでもいい。それも自然環境と人の文化が一つになるという事だし、そこに付随して経済も回っていくんじゃないかと思います。

中村 今の子どもたちの方が、私たちの頃よりも、島のことをすごくいっぱい知っていて、島のことを勉強しているんだなと思っています。それから、ほとんどの子どもたちは十八歳で島を出るから、そこでいろんな体験をしてほしい。そして、将来、みんなが島に帰りたいと思ったときに、それを受け入れられるような社会であるように、職業やいろんなものをつくるのが、私たち大人の仕事だろうと思います。

子どもたちには、集落に誇りを持てるような地域活動に参加してほしいなと強く思います。

いっぱいシマを楽しんで、シマの活動をして、シマのことを好きになってほしい。シマを誇りに思って、将来は帰って来たいって思ってほしい。

昔の写真を見ると、大人たちが酒を飲む隣で子どもたちが一緒にご飯を食べていたりして、子どもはいつもこうやって大人の側にいたんだなって思います。そんな付き合い方を子どもたちにやっていってもらえば、地域に溶け込んで、シマのことを大切に思ってくれると思います。それが地域性や文化だったりするんじゃないかな。

高梨 世界自然遺産がない島、喜界島、冲永良部島、与論島に行くと、この島々の人たちの「世界自然遺産は自分たちには全然関係ない」という意識をすごく強く感じます。その部分を繋げていく枠組みがやっぱり、環境文化型国立公園だと思いますので、自分と

しては、環境文化型国立公園をこれからもっと活用していきたいと思っています。

そういう考え方もあるって、奄美博物館のリニューアルをした時に、環境文化博物館と名乗らせていただいているのですが、奄美群島の一体感を考えた時に本当に大事なのが、環境文化という概念なんだと思っているので、これからもぜひ取り組んでいきたいです。

小野寺 世界自然遺産に対する奄美群島内の意識の差を埋めるためには、自然も文化も一連のものだと考える必要がある。全体を守ることで、遺産地域も守られる。行政、学者がもっと主張しなきゃダメですね。

例えば、奄美群島五島で、生産業者、商工会がいっしょになって連合体を作り、土産物などにどの島もみんな世界遺産の名称を使えるようにしていったらどうか。これはやろうと思えば簡単にできるし、やることによるデメリットもない。屋久島産の焼酎「三岳」には“世界自然遺産の島”というラベルを貼つ



屋久島環境文化村構想

鹿児島県が1990年に策定した鹿児島県総合基本計画の戦略プロジェクトの一つです。屋久島の自然生態系の保全を図るとともに、観光などの地域振興との調和にも配慮しつつ、屋久島の豊かな自然とのふれあいを通じて、人間の活動と環境のかかわりや自然の恵み（環境文化）について学習する拠点を形成しようとするものです。1993年5月にマスター プランが策定されました。同年12月、屋久島の世界自然遺産登録のきっかけとなったプロジェクトです。

て全国に流通している。

やればできると思って行動することが大事だ。
「見る前に跳べ」です。

小栗 環境文化の捉え方は少しずつ違っていても、自然と暮らしとの関係という意味では共通する、まさに実践的な理念だということを感じました。そして、今日の議論はまさに次世代へのメッセージになっていくと思います。今日は本当にありがとうございました。



環境文化型国立公園

2017年3月に奄美群島国立公園が誕生した時、「生態系管理型」と「環境文化型」という従来の国立公園にはなかった新しい考え方方が掲げられました。奄美群島が目指す「環境文化型国立公園」は、人と自然の関わりの中で形成された風景や風土を国立公園の価値として位置づけ、それを守りつないでいくことで地域の暮らし・営みと自然環境の豊かな関係を体験できる国立公園です。奄美群島国立公園のテーマ「生命にぎわう亜熱帯のシマ～森と海と島人の暮らしへ～」にもそれが表されています。

第2部 屋久島・奄美 それぞれの環境文化

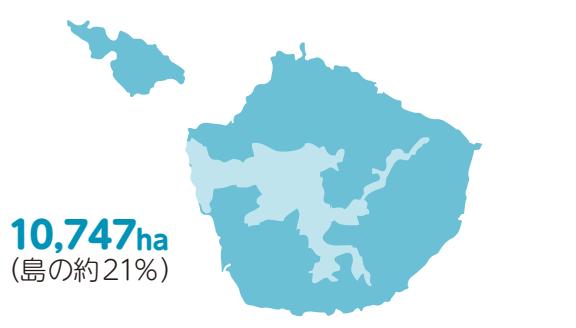
屋久島と奄美、それぞれ背景や経緯は違いますが、自然と共生する地域づくりのキーワードとして「環境文化」を掲げています。そして今、どちらも世界自然遺産を抱える地域として、その価値を将来にわたって守り伝えていく役割も担っています。

自然がなければ生存することができない人間が、地域の自然から糧を得ながら地域の自然との関わりの中で長年にわたり育んできた生活や文化を「環境文化」だとすれば、どんな地域にもそれぞれの環境文化があり、その価値に違いはありません。

しかし、屋久島や奄美は、世界遺産として認められるような自然環境と共に生活や文化を育み、その価値を守り伝えてきた地域だという点で、環境文化も特別な意味合いと発信力をもっています。第2部では、屋久島と奄美はそれぞれどんな自然環境の特徴をもち、自然とどのように関わりどんな生活文化を育んできたのかを、森・海・酒・唄という4つの視点からひもときます。

世界自然遺産地域の概要と登録の基準

屋久島



評価基準 vii(自然景観)

屋久島は、小規模な島嶼にありながら標高2,000mに迫る山岳がそびえ、中心部の山岳地帯から海岸線に至るまで、際立った標高差が存在するとともに、古いものでは樹齢3,000年不及ぶスギを含む原生的な天然林を有するなど、小さな島の中に生物学や自然科学の分野や自然美的観点から重要な地域が存在する点で非常に価値がある資産である。

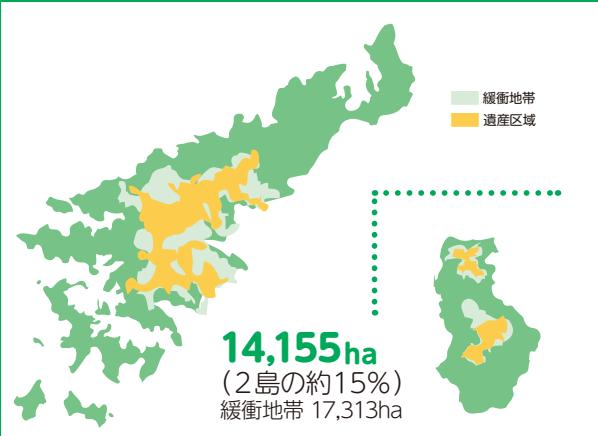
評価基準 ix(生態系)

屋久島は、北緯30度付近では稀な高山を含む島嶼生態系であり、暖温帯地域の原生的な天然林という特異な残存植生が海岸線から山頂部まで連続して分布しており、自然科学の各分野の研究—進化生物学、生物地理学、植生遷移、低地と高地の生態系の相互作用、水文学、暖温帯地域の生態系のプロセスーを行う上で非常に重要である。

屋久島の歴史

- 1921年 屋久島国有林経営の大綱(通称:屋久島憲法)
- 1924年 屋久島スギ原始林 国の天然記念物に指定
- 1964年 霧島屋久国立公園の指定
- 1980年 ユネスコMAB計画の生物圏保存地域に登録
- 1992年 屋久島環境文化村構想(懇談会報告)
- 1993年 屋久島憲章策定
- 1993年 世界自然遺産に登録
- 2012年 屋久島国立公園の指定

奄美大島・徳之島



さらに沖縄島北部、西表島の28,543haを加えた合計42,698haが1件の登録資産

評価基準 x(生物多様性)

本地域は、他に見られない生物が集中した貴重な場所であり、独特で豊かな生物多様性の域内保全において最も重要な自然の生息地を包含している。多くの分類群において種数が多く、固有性も高いさらに、顕著な普遍的価値を示す絶滅危惧種の数や割合も多く、遺存固有種や独特的な進化を遂げた固有種等の数や割合も高い。固有種や世界的絶滅危惧種の保護においてかけがえのない地域である。

奄美大島・徳之島の歴史

- 1447年 琉球王国の支配下に置かれる
- 1611年 琉球王国から薩摩藩に分割される
- 1921年 アマミノクロウサギ 国の天然記念物に指定
- 1953年 奄美群島の日本本土復帰
- 1974年 奄美群島国定公園の指定
- 1995年 奄美「自然の権利」訴訟
- 2017年 奄美群島国立公園の指定(環境文化型国立公園)
- 2021年 世界自然遺産に登録

屋久杉の森

屋久島から台湾へ連なる島々を「琉球弧」と呼びますが、この地域の海底は琉球弧にそって盛り上がった地形となっています。琉球弧の北端で、1400万年前に海底から隆起した花崗岩が屋久島になりました。当時、屋久島は九州と陸続きでしたが、その後の海平面の上昇により、屋久島は九州と切り離されました。陸続きだった頃に屋久島に渡った動物は屋久島に取り残され、ヤクシカやヤクザルなどの亜種（それぞれニホンジカやニホンザルの亜種）へと進化しました。約7300年前に屋久島の北西に位置する鬼界カルデラが大噴火し、その火碎流が海を渡って屋久島の植生を焼き尽くしたといわれています。しかし、近年の研究では、屋久島の生物のすべてが焼き尽くされたわけではなく、残った植物や動物によって現在の生態系が形作られたと考えられています。

屋久島の最高峰である宮之浦岳（標高1936m）は九州で最も高い山です。一般的に、標高が高くなると気温が下がりますが、気温の遞減率（標高100m上昇するごとに低下する気温）を0.7°Cとすると、海岸付近と比べて、宮之浦岳山頂の気温は13.5度ほど低くなります。宮之浦岳山頂の年平均気温は、北海道の北端にみられる亜寒帯と同じレベルです。つまり、屋久島には、海岸付近の亜熱帯をはじめとして、暖温帯、冷温帯、亜寒帯（正確には、亜高山帯）という気候帯が標高にそって配置されているといえます。植生も標高によって変化します。海岸近くでは亜熱帯性の常緑広葉樹林がみられ、標高にそって、暖温帯性の常緑広葉樹林、針葉樹（スギを含む）・落葉広葉樹林の混交林へと植生が変化していきます。山頂付近にはササや高山植物の群落が形成されています。

屋久島のスギ林（ヤクスギの森）は、標高1000mから2000mにかけて見られます。スギ林は日本各地でみられますが、ヤクスギの森は奇異な存在といえます。多くのスギ林は人が植えた人工林です。スギの天然林は一部限られたところにしか残されておらず、まとまった面積の天



縄文杉（2017年7月撮影）
皮肉なことに、形の悪いスギとして伐採されなかつたといわれている。

然林は、秋田県の米代川流域、高知県の魚梁瀬、鹿児島県の屋久島にしか存在しません。この中で、秋田県の米代川流域は積雪地域ですが、他の2か所は日本でも有数の多雨地域です。屋久島と魚梁瀬は年間4000mm以上の降水が記録され、いずれも降水量が多い市町村のトップ3に入りま

す。ほとんどの場合、スギを植えても他の雑草木に被圧されてしまい成林することはありませんが、屋久島のように降水量が極めて多い場所では、他の雑草木が育ちにくく、人の手をかけずにスギが成長できるのかもしれません。

ヤクスギの森がかたち作る環境文化は、信仰と木質資源の2つの視点で捉えられます。屋久島の集落では、代々「岳参り」という信仰の行事が行われてきました。岳参りとは、御岳（宮之浦岳）に祀られている権現結びの神「一品法寿大権現」に、集落の繁栄を祈り、その成就を感謝する行事です。年に2回行われ、旧暦4月に繁栄を祈り、旧暦8月に成就を感謝します。岳参りでは、各集落の代表者が二手に分かれ、それぞれ前岳（各集落の頭上にそびえる山々）と奥岳（宮之浦岳、永田岳、栗生岳、黒味岳）に登り、山頂の祠に、洗米、酒、塩、海藻、白砂、賽銭等をお供えします。山頂に向かう途中、決められた碑石を通過しますが、三本杉やウィルソン株にも碑石が存在し、ヤクスギの巨木も神の力が宿るものとして信仰の対象となっていました。

このようにヤクスギは信仰の対象であり、伐採されることはありませんでした。しかし、1595年に屋久島が島津家の直轄地になると、ヤクスギを伐採し、屋根を葺く平木として薩摩藩に収められました。当天下を取った秀吉が京都方広寺大仏建立の資材としてヤクスギを調達しています。その後もヤクスギの伐採が続き、形の悪いスギを除き、ほとんどのヤクスギが伐採されました。また、伐採されたあとに残された根株は、実に最近まで「土埋木」として切り出されていました。通常、スギが伐採されたあとに残る根株は腐朽菌によって分解されます。しかし、屋久杉には抗菌性物質である樹脂成分が高濃度で含まれており、分解がほとんど起こりません。そのため、江戸時代や明治時代に伐採されたヤクスギの根株が今も残っています。現在、土埋木の搬出は行われてらず、2019年3月の競りが最後になりました。信仰の対象から建築材としての伐採、土埋木の利用と、時代によって扱いが変わってきたヤクスギの森の歴史も一つの環境文化なのかもしれません。



切り出された土埋木
(2015年8月撮影)
屋久島森林管理署の職員から土埋木の説明を受ける鹿児島大学の学生

シイの森

奄美大島と徳之島もまた琉球弧の海底から隆起した島です。琉球弧には、水深1000mを超える幅50kmの凹みが2か所あります。その1つが屋久島と奄美大島の間に存在するトカラ海峡で、もう1つは沖縄島と宮古島の間に存在する慶良間海峡です。約1200万年前、琉球弧の島々は大陸や九州と陸続きであり、一説には、このときの黄河の河口がトカラ海峡であり、長江の河口が慶良間海峡といわれています。その後、1200～200万年前に海面が上昇し、琉球弧の島々は大陸や九州と切り離され、次に、屋久島と奄美大島の間(トカラ海峡)、沖縄島と宮古島の間(慶良間海峡)が分断されたと考えられています。これらの分断によって、奄美大島や徳之島に取り残された生物は、屋久島や宮古島以南とは異なる進化を遂げ、そこにしか存在しない固有種となっています。

琉球弧の島々は、その標高の違いから、「高島」と「低島」に分けられます。高島は、山地がある島であり、最も高い場所の標高は200m以上になります。低島は、平らな地形であり、最も高い場所の標高は300m以下です。高島は、さらに、火山性の島(火山島)と非火山性の島(山地島)に分けられます。火山島は、形成されてからの年数が山地島に比べて短く、また火山活動もあることから、植生が貧弱になっています。一方、山地島では、島の面積が大きく、中央部に奥深い森が形成されます。奄美大島と徳之島は、非火山性の高島であり、中央部の山地林に多くの固有種が生息しています。奄美大島の最高峰は湯湾岳(標高694m)、徳之島の最高峰は井之川岳(標高645m)ですが、気温の遞減率を0.7°Cとすると、山頂の気温は海岸の気温よりも4.7度ほど低くなります。そのため、屋久島ほどではありませんが、標高にともなう植生の変化が確認できます。標高の低い場所にはオキナワウラジロガシを含む亜熱帯性の常緑広葉樹林が、その上部には暖温帯性の常緑広葉樹林が形成されています。さらに、湯湾岳の山頂付近にはアマミヒイラギモチやミヤマシロバイなどの群落がみられるようになります。

亜熱帯性と暖温帯性の常緑広葉樹林では、いずれもスダジイが優占し、オキナワウラジロガシやイジュなどが混交しつつ、「シイの森」を形成しています。

シイの森がかたち作る環境文化も、信仰と木質資源の2



森の中に生育するイジュ(写真中央)
イジュは広葉樹の中でも通直な幹を形成している。

つの視点で捉えることができます。奄美大島の信仰は、森のみならず、海を合わせた一体的なものとなっています。奄美大島では、山が海の近くまで迫っており、その間(海と山の間)に集落が形成される傾向があります。集落奥の山には、テルコ神(山幸の神)とナルコ神(海幸の神)が降り立つとされており(伝承ではこれとは逆に、テルコ神が海の神、ナルコ神が山の神と伝えられているようです)、カミヤマ(神山)と呼ばれるそうです。テルコ神とナルコ神をお迎えするお祭り(ウムケ)が旧暦2月に、お送りするお祭り(オーホリ)が旧暦4月に行われます。これらの祭りを執り行う巫女ノロの祈りの場は「テラ」と言われますが、徳之島の兼久地区には森の中にテラが存在します。シイの森でも奥深い場所は神の領域として信仰の対象になっていたようです。

シイの森の樹木もまた古くから建築材に利用されてきました。残念なことに、シイの森で最も優占しているスダジイは、強度や腐朽の観点から建築材には向いていません。一方、シイの森にみられるオキナワウラジロガシ、イヌマキ、モッコク、イジュは伝統的な家屋の建築に使用されてきました。オキナワウラジロガシ、イヌマキ、モッコクはシロアリへの耐性(耐蟻性)が高く、シロアリの活動が盛んな奄美大島に合った建築材といえます。これらの樹木は沖縄島でも共通して建築に利用されており、2019年の火災で焼失する前の首里城では、正殿の向拝柱(本殿の屋根の中央が前方に張り出した部分の柱)にイヌマキが、小屋丸太梁(屋根を構成する「小屋組み」に含まれる梁)にオキナワウラジロガシが利用されていました。イジュは、より庶民的な木材であり、奄美大島や加計呂麻島の伝統的な民家で梁や上屋柱に使われています。奄美群島で伝統的に用いられてきた穀物貯蔵の倉(高倉)の柱もイジュが用いられています。イジュは、必ずしも耐蟻性が高いとはいませんが、シイの森で優占し、また、通直な幹を持っています。奄美の人々の身近にあり、また、建築材として扱いやすい樹木として、奄美の住文化を作ってきた存在といえます。



鹿児島大学に現存する最古の高倉：高倉の柱にはイジュが使われた。

屋久島・奄美の海

里海の恵み・黒潮の恵み

里海の多様な環境

海岸にはいろんなハビタット（すみ場所）があります。そこにくらす生物たちにとっての生息環境は、陸からの距離と海底が何でできているか（基質）によって決まります。潮汐に伴って干出と冠水を繰り返す、つまり干潮の時に干上がる場所は潮間帯、それより低い場所は潮下帯です。

潮間帯にあって岩盤でできていれば磯（岩礁潮間帯）、砂や泥の場所は砂浜（砂質潮間帯）や干潟と呼ばれます。潮下帯の岩盤上に大型の褐藻（ヒジキの仲間）が群落を作れば海藻藻場となりますが、奄美群島をはじめとする南の島々に特徴的な海岸のハビタットといえば、サンゴ礁を思い浮かべる人が多いでしょう。サンゴ礁はイソギンチャクの仲間である造礁サンゴの群落で、奄美地方でも屋久島沿岸でもみられます。かつてのサンゴ礁が隆起して、潮間帯がサンゴ基質で出来ている海岸もあります。潮下帯で基質が砂や泥の場合にみられるのは、海藻ではなく海草（アマモの仲間）が生える海草藻場です。海草は稻類に近い植物で、奄美地方ではウミヒルモなどからなる海草藻場があります。

陸とのつながりー奄美のマングローブ林

マングローブ林は、波当たりが穏やかな河口域に形成される熱帯・亜熱帯域に特異的なハビタットで、干潟に隣接することがよくあります。これは、塩水に耐えられる樹木（総称マングローブ）が構成する森林であり、奄美地方では主にメヒルギとオヒルギという種類で構成されています。

日本沿岸におけるマングローブ林の北限は鹿児島市の生見海岸とされており、屋久島や種子島にも分布していますが、近年の開発行為の影響もあり、現在、ある程度まとまった面積の林は奄美群島以南でしか見られません。特に奄美大島の住用川と役勝川の河口域には、70ヘクタールにも及ぶマングローブ林が広がっています（写真1）、その面積は西表島に次いで日本第2位です。



写真1

マングローブ林では、樹冠や幹の部分を鳥や陸上昆虫が利用し、冠水する幹の下部にはフジツボ類やカキ類など固着動物が付着して、根の間に巻貝類やカニ類などの底生生物が生息しており、陸と海の両方の生態系が混ざり合っています。このように、異なる生態系の接点となる場所をエコトーンと呼びます。

住用のマングローブ林では、オキナワアナジャコがマングローブの樹冠下に巨大な塚を作り（写真2）、ヤ



写真2



写真3



写真4

マヒルギシジミという二枚貝（写真3）が泥の中に生息しています。このような種はマングローブ林に特異的な生物であると考えられます。また、海や川から離れて乾いたところにはクロベンケイガニ（写真4）やユビアカベンケイガニが生息しており、チゴガニやオキナワハクセンシオマネキ、コメツキガニなど、干潟とマングローブ林両方に生息する種もみられます。

海域では植物プランクトンから食物連鎖が始まります。光合成を行う植物プランクトンが生産者となり、それを動物プランクトンが食べ、それを食べる様々な動物がいて、食う一食われるの連鎖ができあがります。干潟では生産者に泥の上に生息する微細藻類が加わり、マングローブ林では樹木が生産者になります。マングローブ林や干潟には、川を通して陸上から様々な物質が流れ込んでおり、あるものはそのままそこにくらす動物たちの餌になり、またあるものは生産者を支える栄養になっています。後者は無機栄養塩と呼ばれ、生命活動に不可欠なリンや窒素を含んでいますが、陸上の森林や平地の土壤から川へ流れ込みます。このような

物質が流れ込むマングローブ林は、食物の供給という意味でも陸と海の両方にまたがるエコトーンであると言えるでしょう。マングローブ樹木の落葉は、様々な動物に利用されていくのですが、そこで重要な役割をはたすのがベンケイガニ類など比較的乾いた場所で活動しているカニたちです。落葉を粉々に砕いてくれるので、他の動物やバクテリアが利用しやすくなります。

マングローブ林は常に陸域と海域の境界線に位置しており、林は不動不变のものではありません。成樹が密集する林の中心部では実生の成長が悪くなり、光があたる周辺部で成長が良いため、幼樹が密集するのは林の周辺部、特に海岸側になります。樹木が根を張ることによって、林内には流入した底質は堆積し続け、地盤が高くなっています。マングローブの海側では幼樹が林を拡大し、後背部は陸化していくため、マングローブ生態系は海側へと拡大していくのです。海面が上昇すれば、干潮時も干出しないような場所ではマングローブ植物が枯れてしまうため、森林そのものが陸側へ後退します。

このように、マングローブは陸と海の境界線上で変動し続ける生態系であり、そのことによって海岸生物と陸上生物に貴重な生息場所を提供するとともに、海岸域の環境を安定させる役割を果たしていると考えられています。

生物地理区－屋久島と奄美の違い

奄美群島でも屋久島でも、海岸にはこれまでに紹介した様々なハビタットがあり、それぞれのハビタットに特徴的な生物群集がみられます。しかしながら、同じ干潟同士で比べてみても、奄美大島と屋久島あるいはそれより北の南九州では、よく似ているけれど異なる種がいることがあります。干潟にいるカニでシオマネキというグループをご存じでしょうか？オスはどうちらかのはさみが極端に大きく、それを振るディスプレイをす

ることで知られています。奄美群島の干潟には普通にいるオキナワハクセンシオマネキ（写真5）ですが、屋久島やそれより北の九州南部には分布していません。よく似た形と生態を持つハクセンシオマネキ（写真6）がいます。つまり、オキナワハクセンシオマネキの分布



写真5



写真6

北限は奄美群島ということですね。

このように、生物各種が地理的にどの範囲に分布しているのかを整理していくと、分布の北限や南限が多くの種で共通していることがあります。この線を越えると生物相が大きく変わり、逆に線と線の間ではよく似た生物相になりますので、これを生物地理区と呼びます。陸上植物においては、トカラ列島の小宝島と悪石島の間にある渡瀬線を境に、南は東洋区、北は旧北区です。

黒潮の恵み－屋久島近海の豊かな動物相

では海岸の生物ではどうなのか？カニ類や貝類など背骨のない動物では、多くは岩にくつつい砂や泥に潜ったりといった生活をしているものが多く、魚のような移動力がありません。このような生物を底生生物と呼びますが、底生生物の生物地理区もまた、小宝島より南の熱帯区、薩摩半島・大隅半島南岸までの亜熱帯区、それ以北の温暖帶区に分けられています。移動力に乏しい底生生物ですが、その多くは幼少時にプランクトン生活をしています。流れに身を任せて移動していくので、生まれた海岸から遠く離れた場所で大人になるのです。特に沖縄から南九州までの海域では、世界最大級の暖流である黒潮がながれており、最も速いところでは1日に約220Kmという流れがあります。黒潮の影響もあって、底生生物各種の分布域は、陸上生物より少しだけ北へ押し上げられる傾向があります。例えば、沖縄諸島や奄美群島の干潟、特にマングローブ林に隣接する干潟で集団を作るミナミコメツキガニ（写真7）と



写真7

いうカニがいますが、この種はトカラ列島を越えて種子島まで分布しています。

魚類もまた、黒潮の影響を受けて、奄美群島周辺の魚類相が屋久島付近まで押し上げられる傾向があります。そのため、屋久島近海では熱帯区と亜熱帯区両方の種が分布しており、非常に多様な魚類相が見られます。

屋久島・奄美の酒

屋久島の焼酎－大自然の中でのひそやかな酒造り－

宝永5年（1708）、一人のイタリア人宣教師シドッティが屋久島に密入国しました。捕らえられて江戸へ送られ、新井白石の尋問を受け、名著「西洋紀聞」にその名を残した人です。種子島、屋久島から沖縄本島に至る琉球弧は、日本文化の基層をなす文化を運んできました。サツマイモもそのひとつで、焼酎の蒸留技術もこの海上の道をたどってきたと考えられています。サツマイモがお隣の種子島に琉球から伝來したのが、シドッティ上陸の10年前のことなので、シドッティが芋焼酎で歓待されていれば、芋焼酎を飲んだ最初の西洋人としての栄誉を受けることになりますが、残念ながら何の記録も残っていません。

その上陸地から山を望むと花崗岩がむき出しになったモッショム岳がそそり立っています。雨が降ると蒸発して霧となり、立ち上る湯気は冷却されて蒸留水となって落下し、滝となって岩肌を駆け下ります。屋久島は巨大な蒸留所なのです。現在、この屋久島で造られる二つの焼酎製造場の焼酎が人気を呼んでいますが、昔から屋久島は焼酎の産地だったのでしょうか。

屋久島は平地の少ないところです。享保年間（1716～1736年）の田地、畑、屋敷等の面積は、薩摩藩全体で82,000ヘクタール、種子島は1,700ヘクタール、これに対し、屋久島は174ヘクタールしかありませんでした。平坦地が極端に少ないので零細な耕地を切り開きながら農業を営んでいました。集落も点在し、これでは焼酎で生計をたてることは難しかったことでしょう。

屋久島の昔の焼酎造りの実態はほとんど知られていませんが、現在『焼酎川』というバス停が残っていることから、何らかの形で生活の中に焼酎があったと思われます。焼酎は製造免許を持たないと製造できません。免許を持たずに製造すると密造とみなされ取り締まりの対象になります。山深い屋久島では取り締まりが困難であったためか、“1年につき島



焼酎川 バス停

全体で定額の御礼銀”を出せば焼酎の製造が許されました。このような例は他にほとんど例を見ません。享保6年（1721）には屋久島、口永良部島には焼酎屋が10軒程度ありました。第二次大戦（1939～1945）前の頃でも自家用の焼酎を造ることは許されていました。本土では明治32年には自家醸造が禁止されていたのですが、屋久島では大目に見られていたのかもしれません。

その製造方法は次のようなものでした。“藁縄で作った

大きな籠にカライトモを入れ、籠のまま釜に入れてゆでる。これを引き上げてさし麦麹を入れて臼でこすき、それを樽に入れて発酵させる。1週間ほどたったところで加減を見る。これを大鍋に移し、上に丸いコシキを置き、釜とコシキの間にヘワを置いて蒸気が漏れないようにする。コシキは中ほどに錫で作った底を入れる。そしてコシキの上には水を入れて鍋の底、すなわちツブロを冷やすようにし、釜を焚いて上った湯気がこのツブロの下側について凝集し水滴となって流れ出るようにしておく”。これは昔の薩摩の芋焼酎造りとほとんど同じで、このツブロと呼ばれる錫製の薩摩特有の蒸留器も本土から持ち込んだものと思われます。

藩政時代、屋久島は米ではなく平木で年貢を納めていました。日常はサツマイモ、粟、麦、サトイモ、タロイモが主食であり、米飯は病気の時に食べるものでした。この米も屋久島御続米として藩の蔵より米が輸送されていて、米は島内で作るものでは足りなかったのです。では焼酎はどうだったのでしょうか。

大正8年（1919）、上屋久町の生産物移入状況の表によれば、ビール、清酒、ブドウ酒の移入はありますが、焼酎の移入は記録されていません。おそらく自家醸造の焼酎で島内消費は賄われていたと考えられます。公的な記録に残るもの以上に屋久島では家々で焼酎が造られていたと思われます。焼酎造りで出る残渣（焼酎粕）は牛、豚の飼料として、また畑地に散布して肥料として活用されてきましたが、畑地が少なく急峻な地形の屋久島では川に流すことも多かったでしょう。昔は焼酎粕を川に流すことは当たり前でした。栄養豊富な焼酎粕は魚の格好の餌となったのです。“焼酎川”的上流では多くの家々が盛んに焼酎を造っていたことでしょう。

屋久島でも焼酎は生活の中にしっかりと根づいていたのです。モッショム岳の山頂近くに耳岳と呼ばれる奇妙な岩があります。ある人はキリストを抱いたマリア像に見えるといいますが、焼酎を愛する身には焼酎甕を抱いたお坊さんか、酒好きの老人が二人で肩を組みながら酒を酌み交わす姿に見えてきます。



※参考資料：上屋久町郷土史

耳岳

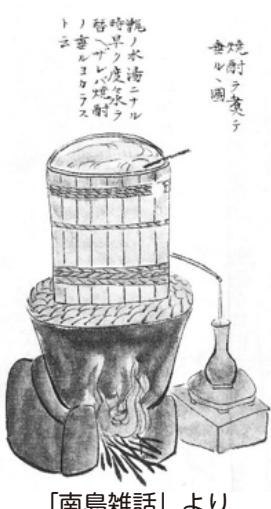
黒糖焼酎－苦難の歴史が育んだ癒しの酒－

琉球には泡盛（米麹だけからつくった米焼酎）が、薩摩には芋焼酎が、そして奄美には黒糖焼酎が良く似合います。泡盛は琉球王府の庇護のもとに育まれ、芋焼酎は薩摩の風土が生み出しました。となれば、黒糖焼酎は奄美的特産を原料に藩の奨励のもとに育ってきたと思いたいところですが、事実は逆です。

薩摩藩直轄となった奄美群島では1690年、琉球から製糖業が導入され、黒糖が薩摩藩の重要な財源となります。1747年には米に代わって年貢を黒糖で納めることになり、稻作からサトウキビ増産への転換が図られます。調所広郷による天保期の改革において奄美の黒糖は島民が一切売買できなくなり、年貢以外の黒糖もすべて藩が日用品と交換するようになりました。島民の生活は苦ししく、一般にはサツマイモを常食とし、凶作の年はソテツを食べる厳しい生活を余儀なくされていました。そして黒糖を焼酎原料に使うことは固く禁じられ、黒糖の製造期間中はコシキ（蒸留器）に封をして、焼酎造りができないようにされ（焼酎甕切封）、違反者は厳しく罰せられました。

幕末の嘉永2年（1849）、薩摩藩のお家騒動に連座して奄美大島に流された薩摩藩士名越左源太は当時の奄美的自然や生活の状況を「南島雑話」に詳細に記しています。そこには焼酎が島民の生活といかに密接に結びついていたか、そして焼酎を造るために悪戦苦闘していたかが記されています。その当時の焼酎原料として使われたのは“百合の根、木いちご、桑の実、カボチャ、ソテツ、椎の実、あわ、麦”などで、サツマイモは大豊作でなければ焼酎に使えず、米も同様でした。ここに黒糖の名前はありません。

では、黒糖作りが始まる前の奄美はどうだったのでしょう。元和9年（1632）に薩摩藩が制定した道之島（奄美諸島）統治の大綱を定めた“大嶋置目之条々”の中に“諸百姓なるへき程しやうちうを作り相納むべきこと”とあります。まだ本土にサツマイモが伝来していない時代で、薩摩藩でも焼酎が不足していたのでしょうか、焼酎を造って薩摩藩に納めよ、というお触れです。当時から奄美群島は焼酎の産地として知られていましたことが分かります。



「南島雑話」より

黒糖焼酎の製造が本格化するのは昭和21年（1946）、米軍統治下になってからのことです。この年、本土では禁止されていた自家醸造が許可されます。使われた主な原料は黒糖とソテツデンブンでした。昭和28年（1953）に本土復帰しますが、日本に返還されれば酒税法上、黒糖は焼酎の原料としては使えないで困ってしまいました。日本では黒糖を原料とした蒸留酒はラム（酒税法ではスピリット）に分類され、焼酎よりも高い酒税が課せられることになりました。焼酎製造免許ではつくれないのです。そこで、日本政府に黒糖の使用許可の陳情をしました。その結果、“鹿児島県大島税務署（奄美群島区）の管轄区域内において製造する場合で、黒糖と米麹を併用するときに限る認める”という特例が設けされました。つまり黒糖焼酎は必ず米麹を併用しなければなりませんが、もともと黒糖焼酎は米麹を使っていたので、ラムとは異なるとされ、また従来の製法を追認されたものであることから支障はありませんでした。そして奄美群島区以外では黒糖焼酎の製造は認めないとということになったのです。ちなみに、沖縄の宮古諸島や八重山諸島でも同じような状況だったにもかかわらず黒糖焼酎が認められなかったのは、こちらは本土復帰の際に泡盛が復活していました。

南島雑話の時代の多彩な焼酎は今では姿を消して、かつて原料にできなかった貴重な黒糖を原料とした焼酎が奄美的特産になっています。特産といえば、原材料がその土地の特産品であることを連想しますが、奄美的黒糖焼酎はそれに加えて奄美群島区以外の地域で製造することが許されていないという条件が加わり、まさに特産中の特産といえるものです。このように生産地域が限定されているのは黒糖焼酎だけです。

黒糖焼酎は今海外でも認知され人気が急上昇中です。底抜けに明るい奄美的宴席や、黒糖焼酎の甘くやわらかな風味に苦難の歴史を偲ぶことは難しいですが、黒糖焼酎は汗も涙も吹き飛ばす南の風の役割を担ってきました。静かに喉元を通り過ぎるその味わいに心傾ければ、かつて黒糖に苦しめられ、今黒糖で癒される奄美的反骨の味と南の島の大らかさを感じます。



屋久島・奄美の唄

屋久島古謡「まつばんだ」を後世に

屋久島には、楽器を添える歌謡はありませんが、山仕事で歌われていた「木挽き歌」「木曳き歌」や笠踊り歌など、本土から持ち込まれた民謡や南の島々を経由したメロディ・リズムが島の風土に溶け込み定着したと思われる歌や芸能が多く見られます。その中でも、「まつばんだ」は、山と人々の暮らしを謡った民謡で、琉球音階が残る古くから屋久島全域で歌われた祝い唄です。研究によると、沖永良部島が北限とされていた琉球音階（ドミファソシド）が、屋久島の湯泊集落の「笠踊り歌」や楠川集落の「盆踊り歌」にも残っており、古代から黒潮に乗って交流北上し、屋久島で歌い継がれてきたと考えられています。

＜まつばんだの歌詞＞

- 屋久のお岳を おろかにや思うなよ
金のな 蔵よりや なお宝な
 - 屋久のお岳の シャクナゲの花よな
年中な 蕾んで 一度咲くな
 - 屋久の八重岳 約束したがな 親がな
許そか そこは知れぬな
 - 田舎なれども 安房の港よ 出船
入船 帆かけ船な

A musical score page featuring a vocal melody and a piano accompaniment. The vocal part is in Japanese, with lyrics like "さくねーおたけーをあさーかー" and "のなをいさよくらよ" appearing in the first two systems. The piano part is labeled "珠球音階" (Koban音階) and "音域" (Yakoku). The score includes a key signature of one sharp, a tempo marking of 58, and a dynamic instruction "強調" (Kyōtō).

現在では、ほとんど謡われなくなっていますが、復活に向けて行われた2020年の屋久島高校の「まつばんだを伝える方法の活動」を紹介します。

屋久島高校では、生徒等にアンケート調査を実施、74%が曲を聞いたことがないとの結果が得られました。そこで、途絶えかけている民謡を実際に伝える方法は、自然な形で町民の生活に寄り添い伝わっていくような伝承方法がよいのではないか。最初に、古いCDから楽譜作成の作業に着手した後、屋久島高校吹奏楽部サックス四重奏が、テンポを20%アップして演奏し音源を作

成しました。さらに、屋久島町へ町内放送を活用して「まつばんだ」を普及するアイデアを提案し、午後5時の時報に放送され、町民の多くの方々に受け入れられました。この屋久島高校の活動は、2021年12月、第16回「地域の伝承文化を学ぶ」コンテストで最高賞の折口信夫賞を受賞しました。

「民謡を聞いた時、自己の心の奥にある心象風景を呼び起される気がした。」「民謡の曲調のみならず、歌詞の一つ一つから、古き祖先たちの故郷屋久島を愛する気持ちが、ひしひと伝わってきた。歴史の中で育まれた民謡は、民の生活そのものであった。」

屋久島高校3年(当時)、寺田 雅さん



民謡「まつばんだ」時報に

「が発案、収録

来月から、鳥取県立の方の防震監査
と、夕鳥村役場消火施設等にスズメの子由
ひの袖と収められた。古く琉球屏風が残
り、「耳見する機会が少なくなったまつ
度、身近な『島の歌』として親しんで
れば」と考へて、新聞の音楽欄にする
ことを思いついた。企画書をな
どめの「夕鳥小説」に代えてこれまで
の夕鳥小説だけに代えておきま
用が出来た。

寺田さんがその原稿紙画面に
起し、「サザエ4公美に贈る
吹奏樂曲で3年冬の空想空間をなしこと
れ、2年の春の空想空間をなしこと
れ、奈谷さんの静かな約人曲のメ
ロディーで、心を豊かにする
効果に対する意が詰られた
曲。メロディーを耳にした時
い出でほんじ」と記している。

(令和2年10月26日南日本新聞)

参考文献：屋久島の民俗ガイド・屋久島環境文化財団
屋久島学8・屋久島学ソサエティ

奄美・唄島プロジェクト

琉球、奄美など南島の原史時代（1000～1300年）に、祭時にノロなど女神人により、祈る言葉「祝詞」（オモリ）が唱えられていました。加計呂麻島俵集落の稻の初穂を祭るアラホバナ（新穂花）のオモリなどが有名です。古代時代（1300～1600年）には、奄美も含む南島文化圏全体で、オモリを母胎とした歌謡が隆盛し、その後、祭祀の場を巡って農耕などの生産叙事歌や、神話や伝承を正しく伝えるための叙事歌に変遷しました。そして、1609年の島津琉球入りと符合するように、琉歌や、奄美の島唄が生まれました。島民の苦しい生活などを背景に、人々の生活歌や恋歌などの感情豊かな多くの抒情歌が、三味線を添えて歌う節歌として民間に広がり、現在も引き継がれています。

2018年、奄美大島自然保護協議会の事業として、(有)アーマイナープロジェクト（代表麓憲吾）が「唄島プロジェクト」を立ち上げました。

奄美大島は、2017年に国立公園に指定され、環境文化型国立公園という新たな価値観が提案されました。それを広く島民に伝えるため、シマ唄の唄者をはじめ、奄美大島出身のアーティストなど、16組の歌手が参加し環境文化ソングを制作しました。楽曲名は、「懐かしい未来へ」作詞／麓憲吾・新元一文、作曲／村松健。2018年5月地元のライブハウスROADHOUSE ASIVIで3日間かけて収録しました。唄者・アーティストは、全員、奄美大島の未来のために一つになれる環境が素晴らしい。得より徳を選択する文化が自然を守る「島心」となると感じられました。



<参加唄者・アーティスト>

元ちとせ	城南海	西平せれな
中孝介	里アンナ	YANAGYA V
カサリンチュ	中村瑞希	我自由丸 S
RIKKI	前山真吾	サーモン&ガーリック
我那霸美奈	森拓斗	陣内雅彦

また、同年8月の夏休みには、島内の小中学生を対象に「唄島CAMP」を開催し、こどもたちに環境文化を学びました。同年10月には、大浜海浜公園野外ステージにて、環境文化祭「唄島ふえすていばるっち。」が開催され、奄美の音楽と共に次世代へ守りつなげたい環境文化を考えるステージトークコーナーも開かれました。エンディングは、「唄島CAMP」に参加したこどもたちと共に「懐かしい未来へ」を合唱しました。2020年以降は、「唄島スクールあらうんど」と題して、島内の小中高校を唄者・アーティストと共に巡り、環境文化を伝えつつ、「懐かしい未来へ」を共に歌い紡いでいます。



先人たちが残してきた自然や文化を守りつなぐ表現やカタチは、時代時代に波長を合わせ変わりつつも、島を想う「島心」は、これまでいつまでも変わらずに次世代へとつなぐことが、「懐かしい未来へ」と辿り着くという意味を持つ、持続可能なマインドクオリティと考えています。

麓憲吾

参考文献：改訂南島歌謡・小野重明



屋久島では、1993年から環境文化をキーワードとする地域おこしが進められる中で、地元の行政と住民が主体となって、里のエコツアーを積極的に進めるために、2011年に屋久島里めぐり推進協議会が設置されました。奄美大島では、2017年に環境文化型国立公園として指定されて以来、住民が主体となって、それぞれの地域で、環境文化をキーワードとするまち歩きが始まりました。そして、両地域が連携して里のエコツアーを進めるために、2018年に奄美・屋久島まち歩き連絡協議会が設置されました。さらに、2023年1月には、全国の世界自然遺産登録地の関係者が結集して「世界自然遺産5地域会議」が設立され、活動の全国展開や世界に向けた情報発信が期待されています。

屋久島里めぐり推進協議会

「里のエコツアー」は鹿児島県が進めた「屋久島環境文化村構想」をベースにした「屋久島環境文化村マスタープラン」(1992年)において推進目標のひとつに位置づけられており、その後設立された屋久島環境文化財団を中心に里のエコツアーへの取り組みがスタートしました。

また屋久島町においても、生態系や自然景観の持続可能な利用を前提とした「エコツーリズム」を推進するための「屋久島町エコツーリズム推進協議会」が進める島全体でのエコツーリズム推進に向けた取り組みの中で、島内各集落に対し「里のエコツアー」の提案を行いました。その後「里のエコツアー」への取り組みを希望した集落と屋久島町、屋久島環境文化財団によって2011年に「屋久島里めぐり推進協議会」が設立されました。

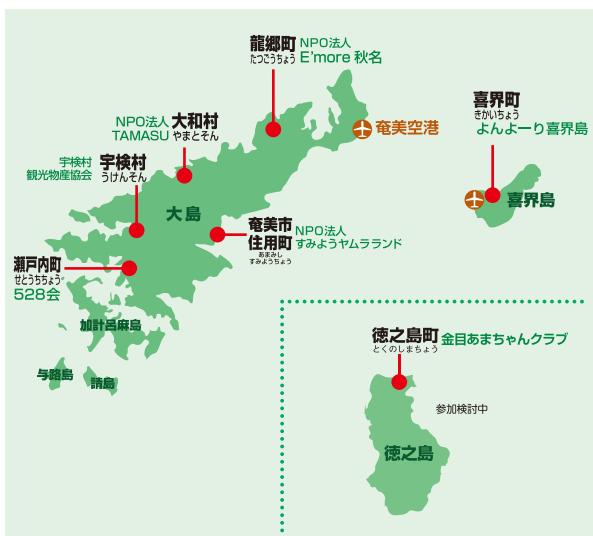
「里めぐり」は各集落ごとに地元の語り部が案内しており、ツアーの企画・開催を通して地域資源や魅力の掘り起こしと発見につながるとともに、地域住民の主体的な参加、観光客との触れ合いや地域産業との連携などによる地域活性化や地域文化等の保全にもつながっています。また参加者にとっては地元の人々と直接交流しガイドブックなどには紹介されていない島のくらしや歴史・文化に触れることで、「環境文化」をはじめとする島の魅力を発見するきっかけとなっています。現在、10集落が取り組みを行っており、今後も増える予定になっています。

(屋久島・口永良部島ユネスコエコパークHP等より)



奄美・屋久島まち歩き連絡協議会

2018年3月、奄美大島の世界自然遺産登録が期待されるなか、世界自然遺産の島、屋久島とエコツアーや通した交流連携を図るために、「奄美・屋久島まち歩き連絡協議会」が設立されました。「屋久島里めぐり推進協議会」事務局を務めている公益財団法人屋久島環境文化財団の呼びかけで、意見交換会や語り部らを集めた合同研修を実施するなど、両地域の関係者らが互いの島を行き来し、さまざまな取り組みを進めてきました。奄美市名瀬の奄美会館で開かれた総会には、オブザーバーとして県や地元行政担当者、まち歩き団体関係者などが出発。6団体2個人の構成でスタートしました。今後、参加団体の拡大や情報交換・発信などの事業連携を行い、相乗効果を高めて地域の活性化を目指すこととしています。



合同研修風景



世界自然遺産 5 地域会議

2023年1月に、国内の世界自然遺産登録5地域の関係者等が屋久島に集まって「世界自然遺産5地域会議」が発足しました。

■会議の趣旨・目的

「わが国の世界自然遺産は、1993年から現在までに5地域が登録されました。第1号の屋久島、白神山地は2023年登録30周年という大きな節目を迎えます。登録された5地域は、それぞれの地域課題を抱えつつ、自然保護のために独自の工夫を重ね、また、連携して新しい自然保護理念の確立や政策提言などを検討してきました。

こうした中で、2025日本国際博覧会（略称：大阪・関西万博）「TEAM EXPO 2025」から自然遺産地域への参加呼びかけがありました。これに積極的に応えて「世界自然遺産5地域会議」を発足させ、活動の第1段階として、「共生」や「環境文化」という日本型自然保護のイメージを世界に向けて発信する機会として行く予定です。

■設立呼びかけ団体

知床	北海道斜里町
白神山地	青森県西目屋村 秋田県藤里町
小笠原諸島	東京都小笠原村
屋久島	鹿児島県屋久島町
奄美大島、徳之島、沖縄島北部及び西表島	鹿児島県奄美市 沖縄県国頭村
財団法人	(公財)知床財団、 (公財)屋久島環境文化財団

会議風景



屋久島

なが 永 田

先人が集落の土地を守った 奥岳が見える唯一の集落

屋久島の西端に位置する「永田」は、清流「永田川」と集落を縦横に流れる小川のせせらぎが心地よい集落です。屋久島で唯一、里から奥岳を望めることができ、冬には雪を被った永田岳が見られます。また、浜は、「前浜」「いなか浜」「四ツ瀬浜」を総称して「永田浜」と呼ばれ、2005年、アカウミガメの産卵地としてラムサール条約登録湿地として登録されています。ウミガメは5月～7月頃産卵で上陸し、7月～9月頃、ふ化した子ガメが海に戻っていきます。農業も盛んで、米、パッションフルーツ、たんかんなどの果実を中心に栽培が行われています。



永田集落と永田岳



神様のクボと集落



横河渓谷

MAP



※) 屋久島の各集落の写真は（公財）屋久島環境文化財団提供

五つの神社



永田集落には「永田嶽神社」(集落の繁栄と豊作、大漁祈願)、「田峰神社」(子宝、安産)、「妙見神社」(漁の神様)、「中山神社」(山の神様)、「小山神社」(縁結びの神様)があります。旧暦9月19日の田峰神社の大祭は、集落が一番賑わう一日です。

永田浜



ウミガメの産卵地として、地元の保護団体が国等と連携して保護研究活動を行っています。上陸頭数は、約5000頭以上の年もありましたが、近年では1000頭程度になっています。そのうち約半数が産卵を行い、子ガメの放流会など環境教育の場となっています。

屋久島灯台



日本から台湾方面に続く航路の整備のため作られた大型沿岸灯台で、1880(明治30)年1月10日に初点灯されました。地元では「永田灯台」とも呼ばれています。

嶽野川(たけのがわ)発電所



1926(大正15)年7月、屋久島電気(株)によって設置された島内初の発電所です。永田、吉田、一湊へ電力の供給を行っています。現在は九州電力が管理しています。

牧新蔵翁碑



屋久島は明治維新後多くの山林が国有林とされました。牧新蔵翁は「永田岳から見える土地は永田のものだ」と主張争いし、1500町歩(約1488ヘクタール)の土地を永田のものとして認めさせました。

モデルコース

集合(永田公民館)

- 1 発電機・牧新蔵翁碑**
- 2 七学童碑**
- 3 両面石敢當**
- 4 永田岳神社**
- 5 叶墓地**
- 6 小山神社**
- 7 屋久島エレジー碑**

連絡先

屋久島里めぐり推進協議会
(屋久島環境文化財団内)
☎ 0997-42-2900
<https://www.yakushima.jp/>

NHK朝ドラ「まんてん」の吉田集落を散策しよう。

吉田集落は、屋久島の北西部に位置し、奥岳に宮之浦岳（1936m）、前岳の吉田岳（1165m）を背後に吉田川の河岸段丘に広がります。集落は東シナ海を望み、海上に沈む夕日は絶景です。2002年には、NHKの朝ドラ「まんてん」のロケ地として全国に放映され、2003年から「まんてん祭り」が開催されるようになりました。

山が海にせまる急峻な地形を利用して家々が軒を寄せ合い、アオリイカやゴマサバの捕れる豊かな漁場を有し、さば節工場があります。山間部でぽんかん・たんかん等の柑橘類の栽培が行われ、かつての棚田跡では、ガジュツ、里芋、甘藷などの栽培が行われています。



集落風景



ツアー風景



MAP



日高(ひだか)神社



平家の落人を祀っているという由来があります。平家の落人は、屋久島の中で最初にこの吉田集落に上陸し、島内の各地へ分散したと言われています。また「吉田神社」とも呼ばれ、吉田岳頂上がその御神体と言われています。

祀りの大岩・古道(参道)の跡



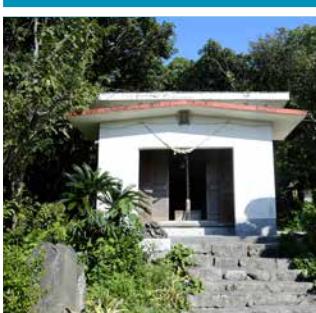
古来から元旦に、集落の真下にある砂浜の海水で身を清め、大岩に合唱し、森山神社に通ずる参道をぬって日高神社に参拝するのが慣わしなっていました。

瀬風呂(トンボレ)



海岸の岩を利用した瀬風呂(トンボレ)が6カ所あります。自然の岩壺に、塩水に真水を加え、その中に焚き火で焼いた石ころを入れます。素潜り漁の後に体を温めたり、農作業の後薬草を入れ、疲労、切り傷の治療に利用していました。

森山(もりやま)神社



平家の落人が最初に着いたのが、この神社の砂浜「下の浜」というところで別名「浜神社」とも言われています。また、手置帆負(手鏡)大神大山津見命が祀られており安産の神様と言われています。

岡エビス様



集落の入口にあたる場所に祀られています。朝ドラ「まんてん」のロケで他所から移設され、撮影終了後、地元の要望で残されました。

NHK朝ドラ「まんてん」ロケ地

船田公民館(吉田公民館)・岡エビス様・火の見やぐら・墓地・トンボレ・鬼火たきなどがあります。

モデルコース

集合(吉田生活館)

1 まんてん館

2 岡エビス様

3 日高神社

4 吉田靈園

5 花崗岩の巨石群

6 森山神社

7 祀りの大岩

8 吉田バス停

連絡先

屋久島里めぐり推進協議会
(屋久島環境文化財団内)

☎ 0997-42-2900

<https://www.yakushima.jp/>

天然の良港と鯖節工場群

屋久島の最北部に位置し、一湊湾は古くから天然の良港として利用され、屋久島の玄関口の一つとして栄えてきました。矢筈岬は屋久島最北端に位置し、一湊灯台があります。岬の西側には、矢筈嶽神社があり、八幡神が祀られています。岬のたもとには屋久島を代表するダイビングスポットがあり、夏場には観光客で賑わいを見せます。一湊では、サバの一本釣り漁が盛んで首折れサバの刺身やサバのすき焼きが親しまれています。また、一湊川右岸には鯖節工場群があり、日本の香り風景百選に選ばれています。一湊川上流には、世界でここでしか見ることのできない国指定天然記念物「ヤクシマカワゴロモ」が自生しています。



集落風景



ツアーフィールド

一湊漁港

屋久島一の漁港。屋久島の特産である首折れサバの水揚げの場所です。また、一湊の海の中でも、赤灯台から少し離れた沖の方に戦闘機の残骸が沈んでいて、それが漁礁となって釣りの人気スポットになっています。

MAP



鯖節工場



屋久島特産の一つであり、環境省の「日本の香り風景百選」に選ばれている鯖節工場群。昭和の初期までは、鯖節工場が町中に数多く点在し、火事になることが度々ありました。そのため、鯖節工場を一湊川河口に集団移転し、ここを移転地と呼ぶようになりました。

矢筈嶽（やはずだけ）神社



集落内では「八幡様」と呼ばれている神社で、創立・造営の時期は不明。祭神は、「応神天皇」「仲哀天皇」「神功皇后」が祀られています。神社の奥には洞窟があり、「洞窟に入った猫が隣の種子島で発見された」という伝説が残っています。

町エビス



一湊川支流（現ガジュマル通り）埋立時に出てきた水神様と一緒に安置されています。現在のエビス様は屋久杉を木彫りして作られたえびす様が祀られています。町エビスは集落の商売繁盛を願うもので、集落民を見守っています。

浜エビス



集落の発展と大漁祈願、航海安全を願い、一湊漁港を見守るように安置されているエビス様。古くから漁師は、大漁で帰港した際には、お札としてエビス様に魚を奉納していました。

布引（ぬのびき）の滝公園・樟腦（しょうのう）製造所



一湊の集落内にある滝で、滝壺まですぐ歩いて行くことができます。公園のすぐ近くに日本で希少となったクスノキの樟腦製造所「くすのきガレージ」があります。

モデルコース

集合（一湊公民館）

1 一湊漁港

2 西郷隆盛上陸碑

3 くすのき樟腦製造所

4 布引の滝

5 松山遺跡

6 ガジュマル通り

7 町エビス

8 サバ節工場

連絡先

屋久島里めぐり推進協議会

(屋久島環境文化財団内)

☎ 0997-42-2900

<https://www.yakushima.jp/>

やくさと
屋久島の玄関口、益救の里を探る

屋久島北部に位置し、屋久島と鹿児島を結ぶフェリーや、高速船、また口永良部島を結ぶフェリーが入港する宮之浦港があり、世帯数が島内最大の集落です。集落の中央には宮之浦川が流れ、川の両岸及び河口付近は市街地化がなされ多くの住宅が立ち並んでいます。宮之浦川左岸側は、緩傾斜地が広がり、益救神社、久本寺、山口神社などの寺社や、郵便局、NTT局など島の行政や公益に必要な施設や、屋久島電工株式会社の大型工場があります。右岸側は、海岸段丘が広がっていて、牛床詣所、川向神社、慈光寺などや、小中学校や検察庁、簡易裁判所などの施設があります。宮之浦港近くに屋久島環境文化村センターがあります。



集落全景



ツアー風景



MAP



益救神社（やくじんじゃ）



「延喜式神名帳」(927年)に記載されている南島唯一の式内社です。祭神は山幸彦（一品法寿大權現/天津日高彦火火出見尊）で、奥岳は、

宮之浦岳であることから山岳信仰と深い関わりがあります。別名「須久比ノ宮（救いの宮）」とも言われています。例大祭は、現在は、4月29日に集落の春祭りとして歌や踊りが奉納されます。

牛床詣所（うしどこもいしょ）



山岳信仰の重要な行事である「岳参り」の折りに、家族が山に詣でた男たちを送迎した場所です。岳参りは女人禁制だったため、参加

出来ない婦人や子どもたちは、ここで遙か山奥の御岳を拝みました。詣所内には、疫病退散や大漁祈願、安全祈願などさまざまな石塔が、六十数基奉納されています。

久本寺（くほんじ）



長享2年(1488)日増によって開山。日増の布教活動により屋久島は全島日蓮宗（法華宗）となり、江戸時代末期の「三国名勝図会」

によると「島中仏寺は皆日蓮宗のみにて、他宗なし」と言われています。境内には法華経三千部供養塔や島津義久第七回忌供養塔など町指定の文化財があります。

宮之浦川橋（通称古橋）



1928年に熊本営林局の手で設計が行われ、1930年に竣工した鉄筋コンクリート橋です。戦災により1945年に一部が破損しましたが、1955年原形に復旧されました。

檀那墓（だんなはか）



薩摩藩は、屋久島統治や屋久杉管理のため、寛永十九年(1642年)、屋久島代官（のちの屋久島奉行所）を設置し、宮之浦に現地役所を置きました。藩士が交替で屋久島に派遣され、その中には屋久島で亡くなった役人も多く、檀那墓は、檀那衆と呼ばれていた藩士の墓石群です。

モデルコース

集合（1 益救神社）

2 屋久杉土埋木置場

3 江戸時代の船着場

4 宮之浦川古橋

5 屋久島奉行所跡

6 久本寺／檀那墓

7 ふれあいプラザやくしま館

連絡先

屋久島里めぐり推進協議会
(屋久島環境文化財団内)

☎ 0997-42-2900

<https://www.yakushima.jp/>

ガジュツと古文書の里

楠川集落は、屋久島の北部に位置し、製薬工場があり、原料となるガジュツやウコンの栽培、近年では大手のメーカーがお茶の栽培を行っています。また、菅原道真公を祀った「楠川天満宮」、屋久島に残る歴史的資料「楠川古文書」のほか、「楠川盆踊り」、火縄銃による合戦があったと言い伝えられている「楠川城跡」など歴史と文化が色濃く残る集落です。楠川歩道は奥岳に通じる重要な道です。



集落全景



横川盆踊り



楠川ツアーフェスティバル

MAP



楠川天満宮



楠川集落の中心部に位置し、集落行事の拠点となっています。楠川の海岸に一体の神像が流れ着き、薩摩藩が鑑定したところ天神様の尊像とわかり、楠川天満宮に安置したと言われています。

楠川城



1524年、種子島氏によって築城され日本で初めて実戦で火縄銃が使われたともいわれる場所です。一時的に島を占有した禰宿（ねじめ）氏から城を奪還すべく、鉄砲伝来の翌年である1544年に合戦が行われたとされています。

田代善太郎(たしろぜんたろう)の碑



田代 善太郎 (1872～1947)。日本各地で植物標本を収集し、植物分類学、植物地理学を研究しました。ウィルソン博士と知り合い、内務省の委託で屋久島の植物を調査しました。

楠川区有文書

楠川区に伝来してきた古文書は、元禄年間（1678～1704）から昭和10年（1935）代までの文書・記録です。これらは役所から来た文書を書き写したものや、他の集落から届けられた文書などで、島内の外の集落でも作成・保存された筈ですが、楠川区だけが現存しています。特に、伊能忠敬の測量に関わる詳細な記録は貴重な資料となっています。（屋久島通信 74号）

楠川歩道



白谷雲水峡から奥岳につながり、江戸時代に屋久杉切り出しで栄えた歩道です。植物学者ウィルソン博士が辿った軌跡を追うことができます。

モデルコース

集合（茶屋じょんこう）

- 1 熊野神社
- 2 楠川天満宮
- 3 楠川古文書
- 4 楠川本蓮寺
- 5 田代善太郎碑
- 6 正木の森
- 7 楠川城跡

連絡先

屋久島里めぐり推進協議会
(屋久島環境文化財団内)
☎ 0997-42-2900
<https://www.yakushima.jp/>

とまりじょちく

屋久島の林業の始祖、泊如竹の里

安房は安房川の河岸段丘に広がり、高速船の発着や、トビウオ漁の基地である安房港があり、屋久島で二番目に人口の多い町です。屋久島の林業の発展に貢献した泊如竹の生まれた町。泊如竹は、水の乏しかった安房に水路整備や、屋久杉の活用について貢献しました。安房川上流部には、木材の一大生産拠点として栄えた小杉谷を擁し、伐採木運搬のための森林鉄道は安房港まで下りてきました。今も発電所の管理のために、日本で唯一現存する森林鉄道として日本近代化産業遺産に指定されています。現在も安房港は貯木場があり、近年、伐採期を迎えた地杉の丸太が積まれています。



安房川



ツアー風景



MAP



泊如竹(とまりじょちく)の墓



泊如竹は、1569年、安房に生まれ、出家して日章と称しました。京に上り朱子学を学んだ後、帰鹿し南浦文之の門に入り、名も如竹と改めました。1647年、安房に帰り、水道整備や農業改良などに努めたりしました。「屋久聖人」と呼ばれています。

安房大橋・松峯大橋



屋久島の自然豊かな森の中をゆったりと流れる安房川に架かる代表的な橋として、安房大橋と松峯大橋があります。安房川の河口にかかる安房大橋は、1929年に釣り橋型の橋としてかけられ、1975年には現在の形状になりました。さらに上

流に架かる松峯大橋は、水面から約70m。橋から照葉樹林の中を安房川が静かに流れる眺めは絶景です。安房川ではカヤックやSUPなどのリバーアクティビティが楽しめます。

安房港貯木場



安房港は屋久島の南東岸に位置し、鹿児島や種子島への高速船が就航しています。古くから屋久杉の積み出し港として、また近海漁業の基地港として栄えてきました。港は安房川の河口部にあり、すぐ上流で行われる流れ船は夏の名物となっています。

如竹(じょちく)踊り



「屋久聖人」儒学者・泊如竹の遺徳を偲んで安房の人々が創作したものです。毎年、如竹の命日、旧暦5月25日に、「泊如竹の墓」の前で踊りを奉納しています。2006年に、鹿児島県無形民俗文化財に指定されています。

如竹通り



安房川に沿って左岸に大きな道があり、「如竹通り」と呼ばれています。町中と安房港を繋ぐ通りです。如竹通りには、石碑やレリーフ、顕彰碑、お堂などがある如竹廟があり、そのお堂の中に如竹の墓があります。

モデルコース

集合（安房公民館）

1 安房港浜えびす

2 如竹神社

3 本佛寺・粟穂神社

4 大石亀女の石

5 安房川橋

6 面影の水

7 安房大橋

連絡先

屋久島里めぐり推進協議会
(屋久島環境文化財団内)

☎ 0997-42-2900

<https://www.yakushima.jp/>

山幸、海幸の里で産業体験

春牧集落は、屋久島の東部に位置し、縄文杉やヤクスギランド、紀元杉、宮之浦岳など山岳部への玄関口となっています。集落内からは縄文弥生期の石器や土器が多数出土しており、中でも横峯遺跡からは、縄文時代後期（約3500年前）の集落（竪穴住居跡）が発見されました。

集落の背後には、前岳（965.9m）がそびえ、前面にはサンゴ礁の海岸が広がる山幸、海幸に恵まれた集落です。現在では、世界の銘木ヤクスギ、水揚げ高日本一を誇るトビウオを原材料にした加工が盛んに行われています。ヤクスギ加工、トビウオ加工、芋焼酎造りなど産業体験ができる春牧里めぐりをお楽しみください。



集落全景



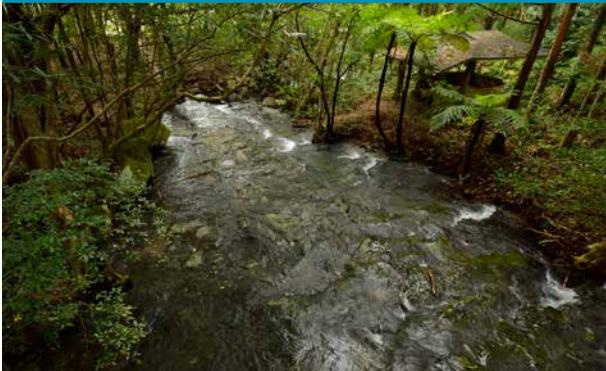
ツアー風景



MAP



滝之川の一枚岩

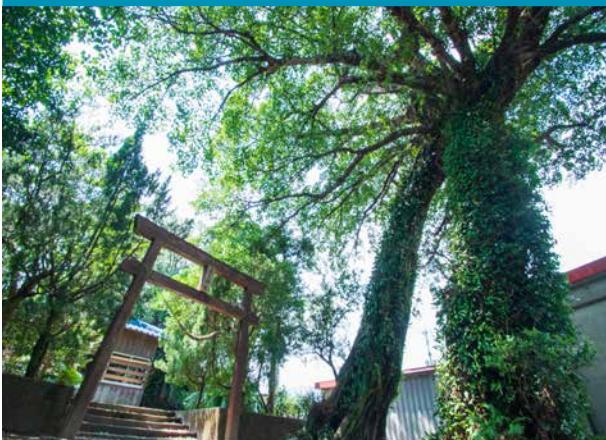


『滝之川の一枚岩』は屋久島の海岸線にも見られる『堆積岩』と同じものです。

4000万年前に海の底の海溝に堆積していた泥や砂が海洋プレートの移動によって陸地に押しつけられてできたものだと言われています。

真夏でも日陰なので涼しくて過ごしやすい場所です。

盛久神社(もりひさじんじゃ)と夫婦アコウ



平家の落人伝承にまつわる神社の一つで、平家の武将平盛久が祀られています。この神社では、唯一ヤクスギを使った絵馬を奉納できます。神社の境内には、樹齢100年を越える大きなアコウの木が鬱蒼と茂っています。熱帯樹ガジュマルも見ることができます。

安房森林軌道・トロッコ発着所



今なお現役の森林軌道のトロッコ発着所です。屋久杉を搬出してきた軌道は、1923年、屋久杉の伐採基地であった小杉谷と安房港の16kmに建設されました。2009年には国の近代化産業遺産に認定されました。

春田浜(はるたはま)海岸



屋久島で最大の離水サンゴ礁が見られます。約6000年前に形成されました。サンゴ礁のダイオプチールでは色とりどりの熱帯魚が見られます。先人たちが利用した瀬風呂、潮だめも多数存在します。

オデラの石塔



この地にはかつて五安寺という律宗のお寺があったと言われています。大小数個の石塔と共に三基の五輪塔があり、五輪塔の中には、律宗時代(14世紀中期～15世紀中期)のものや法華宗時代(15世紀後期～16世紀初期)のものがあります。律宗は中国に興り、唐僧・鑑真が日本に伝えたとされています。

モデルコース

集合(春牧福祉館)

1 盛久神社・夫婦アコウ

2 焼酎工場

3 森林軌道・トロッコ発着所

4 健康の森公園

5 滝の川の一枚岩

6 松峯大橋・安房川

連絡先

屋久島里めぐり推進協議会
(屋久島環境文化財団内)

☎ 0997-42-2900

<https://www.yakushima.jp/>

温暖でぽんかんの原木と海中温泉の里

「海が真南、山が真北」と言われるほどに、屋久島の南部に位置する集落の一つであり、西は境川、東は湯川で、小島区、湯泊区と隣接しています。東西に3.5km、南北に2km内外にあり、比較的平坦な地形となっています。湯泊区の湯川はその名の通り温泉の湧く川で、その河口の平内側海岸には温泉が湧出しています。その一部は岩を掘削して浴槽とし、海中温泉として利用されています。



中央部、東部の前岳



ツアーフェス



ぽんかん原木



1924年、黒葛原兼成(つづらはらかねなり)氏がぽんかん苗木を移入し、屋久島でぽんかんの栽培が始まりました。現在、国内でも有数のぽんかん、たんかんの生産地となりました。

八幡神社



祭神は、応神天皇の誉田和氣命(ほむだわけのみこと)。祈願祭である大祭は、春と秋の年二回行われます。神社に米、魚、野菜、焼酎などのお供えをし神事の後、棒踊りが奉納されます。

平内の海岸段丘



屋久島では、花崗岩山塊の隆起とともに上昇した熊毛層(堆積岩)が高さ10~30m程の海岸段丘をつくっています。平内地区は、海岸段丘と花崗岩の山の間にあり、生活の場は、段丘上の山すそに形成された傾斜地に広がっています。

平内海中温泉



平内海岸にある海中から湧き出た温泉。1日2回の干潮時の前後約2時間だけ入浴できる珍しい温泉です。自然にできた窪みに少し手を加えた2つの浴槽があります。

モデルコース

集合 (平内生活館)

1 観音竹

2 だんなじいが墓

3 西村越前守

4 青年神社

5 お産の神社

6 八幡神社

7 ぽんかん園

連絡先

屋久島里めぐり推進協議会
(屋久島環境文化財団内)

☎ 0997-42-2900

<https://www.yakushima.jp/>

亞熱帶的気候と果樹、漁業、石垣の里

中間集落は、屋久島の南西に位置する集落であり、七五岳（1448 m）から流れる中間川の河口に広がっています。年平均気温は高く、雨量は島内でも少ない地域であり、かつては島内で最も良質の黒糖を生産し、また、果樹などが収穫できる地域です。集落は、海岸近くに山が迫り、耕地は海岸から1 km内外の幅で広がり、一部は中間川沿いで上流に向かっています。谷が比較的深く、平坦な土地が少ないため農地は細分化され、一反歩を越える耕地は少なく、藩政時代から村人のほとんどがカツオやトビウオなどの漁を行っていたと記録されています。



ガジュマルアーチ



里めぐり



里めぐり時に供される手作り郷土菓子

MAP



中間神社



ククノチガミなど3神が祀られ、春秋の例大祭に祝い舞が奉納されます。集落の西端、標高40mの場所にあり、集落と浜が見下ろせます。ガジュマルなど亜熱帯植物に囲まれ、集落のよりどころにふさわしいたたずまいがあります。

集落内石垣



傾斜地にある集落には、明治20年頃、石工職人の清伊太郎らが造った畠地などの石積みや家を取り囲む見事な石垣、石垣が多く見られます。中間集落の特徴になっています。

森山大明神 (もりやまだいみょうじん)



古来より山岳信仰の島であることから、山の神への祈祷の場、また集落の人達が自由に参拝できる場として建立されました。奥岳信仰の入口の位置にあたり、もとは岳参りの逆迎えの場とされています。

中間フルーツガーデン



野生種、園芸種あわせて約1,600～2,000種の熱帯植物や南国の果実が、所狭しと生い茂っていて、フルーツや花の甘い香りが園内いっぱいに漂っています。バナナ、マンゴー、パパイヤ、グアバなどの南国のフルーツが実際に実っている姿を見ることができ、南国のトロピカルな雰囲気を満喫できます。

中間のガジュマル



中間集落に入ってすぐの「中間橋」のたもとにある巨大なガジュマルです。幹からは無数の気根が伸び、中央に空いたトンネルの下での写真撮影ができます。朝ドラ「まんてん」のロケ地。町指定文化財です。

モデルコース

集合 (中間公民館)

- 1 中間神社
- 2 集落内石垣
- 3 ガジュマル
- 4 中間港エビス様
- 5 共同墓地
- 6 中間浜・亀石
- 7 ウミガメ孵化場
- 8 集落内の古民家など

連絡先

屋久島里めぐり推進協議会
(屋久島環境文化財団内)
☎ 0997-42-2900
<https://www.yakushima.jp/>

「緑の火山島」で学びましょう

口永良部島は、長径 12km、最大幅 5km の美しい火山島で、今なお噴煙をたなびかせる新岳（標高 626 m）がそびえ、島の海岸周辺の随所には良質な温泉が湧き出ています。野生のシカのほか、天然記念物エラブオオコウモリなど希少な動植物も分布し、島全体が「屋久島国立公園」「生物圏保存地域」（ユネスコエコパーク）に認定されています。活火山と豊かな自然が残ることから「緑の火山島」と呼ばれています。島の周辺は魚釣りのポイントも多く、1年を通して観光客が訪れます。また、2015 年の大噴火では島民全員が屋久島へ避難しましたが、帰島後も火山と共に暮らしています。



集落全景



ツアー風景



MAP

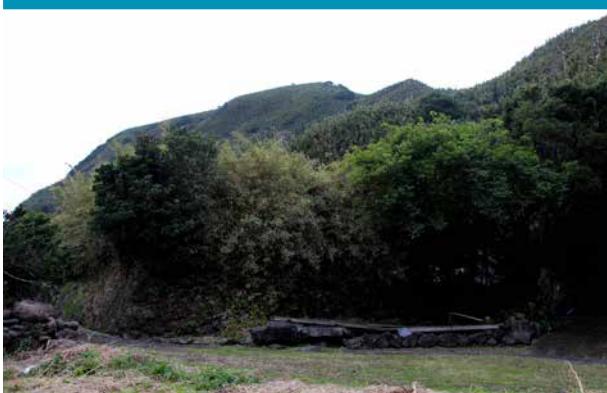


柴昌範氏（シバマサノリ）顕彰碑



柴昌範氏は、1933年に、老舗恵命堂を設立し、ガジュツを原料とする胃腸薬恵命我神散を創製しました。口永良部島には、かつて工場があり、ガジュツ生産が行われていました。

番所跡と異人館跡



1700年頃、島には津口番所（バントカ）が置かれました。藩政時代に密貿易をしたころの番所のようです。本村港の西端に、番所跡と異人館跡があります。慶応年間まではオランダ人が居住し、薩摩の密貿易船との交渉があったようです。



「平成27年口永良部島噴火」（気象庁命名）2015年5月29日9時59分、新岳から噴火（マグマ水蒸気噴火）し、噴煙が火口から約10,000メートルの高さまで達しました。気象庁は、同日噴火警報を発し、警戒レベルを最高レベルの5（避難）に引き上げました。同時に、火碎流が発生し、新岳の火口からほぼ全方角に広がり、西側と北西側の向江浜地区では海岸まで到達しました。同日の15時には、屋久島町営フェリー太陽で全島民避難が行われました。同年10月には、気象庁が警戒範囲を火口の概ね2キロメートル以内したことなどから、12月25日には、町は一部地域を除き島の避難指示を解除しました。

本村港



現在、口永良部島の玄関口となっています。島は、ひょうたん型で、くびれた入り江は、帆船時代にはなくてはならない避難港でした。西郷隆盛は、奄美遠島の帰途に、悪天候のために島に避難し風待ちをしました。また、屋久島の一湊港とともに、薩摩藩の密貿易港だったのです。

モデルコース

集合 (口永良部島へき地保健福祉館)

1 柴昌範氏顕彰碑

2 歴史資料館

3 本村港

4 番所跡と異人館跡

5 本村集落のメインストリート

6 牛の競り市場跡

7 小学校跡・発電所

8 本行寺跡

連絡先

屋久島里めぐり推進協議会
(屋久島環境文化財団内)

☎ 0997-42-2900

<https://www.yakushima.jp/>

総理大臣賞受賞！地杉ブランドの屋久島町新庁舎

戦後に植林した地杉が伐期を迎えています。利用可能量は民有林 100 万m³、国有林 140 万m³、計 240 万m³。現状の年間活用量は、わずか 1.1 万m³にとどまっています。

屋久島町は、2017 年から、「屋久島の地杉を活かした庁舎づくりと地杉の特徴を活かしたブランド戦略」プロジェクトに取り組み、その主要事業となる屋久島町新庁舎を、2019 年 5 月にオープンしました。地杉には①香りが甘く鎮静効果が圧倒的、②黒芯が多く、見た目に重厚感がある、③硬くて強い、④割れにくいという特徴があり、新庁舎は、天井や梁などに特徴的な木組みを施した全て木造の建築となっています。また、中庭（やくしまの輪）を囲むように、フォーラム棟、窓口棟、事務棟、議会（ホール）棟が回遊動線で結ばれています。建築分野で高い評価を受け、「2019 木材施設コンクール」で内閣総理大臣賞を受賞しました。また、新庁舎建設に伴い、222 トンの CO₂ 固定が認証され、脱炭素社会形成にも貢献しています。

屋久島里めぐり推進協議会では、屋久島の地杉ブランド戦略を学ぶエコツアーや実施することとしています。（屋久島・知の巨人たち等より）



屋久島町新庁舎

屋久島地杉の伐採と加工



地杉の伐採は、国有林を中心に行われています。島内の素材生産業者4社が、伐採、搬出を行っており、地杉加工業者に搬入されます。

2015年に屋久島地杉加工センターが設立され、現在、年間5~6000m³の杉材の加工が行われ島外に搬出されています。

また、その他の島内製材業者は年間約1000m³が加工され、主に島内需要を賄っています。屋久島町新庁舎の杉材はすべて地元業者が請け負いました。屋久島地杉は、油分が多く、耐久性、対候性が強いことから、主にデッキ材や外壁材などの製品に使われています。



植林事業



地杉の伐採・搬出に加えて植林まで一貫した事業が一部行われています。実生からの苗木つくりは2、3年、さし木では約半年かけて苗木を育成し植林が行われています。後世に地杉を残すための貴重な事業となっています。

屋久杉自然館



屋久杉や屋久島の林業の歴史だけでなく、自然や文化も伝える総合博物館として1989年に開館しました。年間約2.6万人

の来館者があります。2005年12月、縄文杉の枝の一部が折れ、「いのちの枝」と名づけられました。全国から多くの資金援助が得られ、屋久杉自然館に展示されています。資金の一部は「縄文杉いのちの枝基金」に引き継がれ、自然保護などのために役立てています。

屋久島の香りと木育活動



屋久島では、民間主導で、間伐材を使ったさまざまな取組みが行われています。一つ目は、屋久島の香りづくりです。油分を多く含む性質を利用して、水蒸気蒸留で精油を抽出し、地杉についても「やくしま地杉精油」として販売されています。

次に、子どものころから木を身近に使い、人と木や森との関わりを学び、豊かな心を育む木育活動です。育児中の母親たちが、子ども用の地元木材製品を町に提供したり、地元高校の生徒と一緒に地元材を使った木琴を試作するなどの活動を行っています。



屋久杉

屋久杉は標高800mから1800mのスギ林帯に自生し、樹齢1000年以上を「屋久杉」、それ以下は「小杉」と呼ばれています。

昭和30年代からは大量に伐採されました。環境保護問題などにより1987年には国有林の伐採量が大幅に縮減し、さらに1993年の世界自然遺産登録を機に、屋久杉の伐採は、全面禁止になりました。一方、戦後に植林された30~50年生の杉は「地杉」「屋久島地杉」と呼ばれ、今、伐期を迎えています。

連絡先

屋久島里めぐり推進協議会
(屋久島環境文化財団内)

☎ 0997-42-2900

<https://www.yakushima.jp/>



白砂の国直海岸とフクギ並木。夕焼けフェスとふくぎナイトを楽しもう

大和村の国直集落は奄美大島の中部に位置し東シナ海に面した小さな集落。国立公園宮古崎や白砂の国直海岸、昔ながらのフクギ並木など美しい自然景観を有し、古くから観光地として知られてきました。近年はSUP（スタンドアップパドルボード）やシュノーケルといったマリンレジャーが盛んで多くの観光客で賑わっています。人々の暮らしは海とのつながりが深く、老若男女問わず漁を営み年間を通じて多品種の海の幸を食しています。また、若者らを中心に「宮古崎つつじウォーク」や「ウミガメミーティング」、「ふくぎナイト」、「夕焼けミュージックフェス」といった対外向けイベントも多く開催されるなど活気に溢れた集落です。

夕焼けミュージックフェス(ウミガメ公園)



国直海岸に隣接するウミガメ公園には高倉を模した東屋や展望デッキ、コンビネーション遊具などが整備されており海水浴や夕日観賞を楽しむことができます。また、例年6月には島内外から多くのミュージシャンが集う「夕焼けミュージックフェス」が開催されます。

MAP



すももロード(国直海岸)



国直海岸は毎年5月から8月の間ウミガメが産卵のため上陸します。集落の人々は人工の光でウミガメを刺激しないよう海岸沿いの街灯に赤いカバーをかけてウミガメの産卵、ふ化を見守っています（ウミガメは赤い光を認識できないため）。夏の間赤く染まる道路は大和村の特産品のスモモになぞらえて「すももロード」と呼ばれるようになりました。

クガツクンチ豊年祭（国直集落公民館）



ガツクンチ豊年祭は旧暦の九月九日直近の日曜日に行われる国直集落の一大行事。テラシキ参りのフリダシ（力士による行列）から始まり、男性は子どもから青年まで奉納相撲をとり、女性らは芸能や余興を披露し場を盛り上げます。夜には土俵を中心に男女が輪になって八月踊りを踊ります。豊年祭を境に集落は冬へと向かいます。

ふくぎナイト（フクギ並木）



フクギはフクギ科の常緑高木。防風林や防火林として人々の暮らしを守ってきた国直集落のシンボルツリーです。集落の人々はフクギの植樹や保存啓発活動に取り組んできました。毎年12月にはフクギ並木をキャンドルやイルミネーションでライトアップする「ふくぎナイト」を国直青年団の皆さんのが開催。フクギを活用した集落の活性化に努めています。

若水汲み（テラシキ）



テラシキは国直集落の聖地として崇められ豊年祭の祈願や正月の初詣など時期折々に人々が訪れます。また、テラシキには背後のクニナオグスクから流れ出る水があり生活用水として利用してきました。テラシキの水には神聖な力があると信じられ、元日の早朝にテラシキで汲んだ水で顔を洗いお茶を飲む「若水汲み」の習わしがあります。

おすすめモデルコース

1 10:00 ウミガメ公園

2 10:15 国直海岸

3 10:30 国直公民館

4 10:45 フクギ並木

5 11:00 テラシキ

6 11:30 国直グスク

7 12:00 ウミガメ公園

連絡先

NPO 法人 TAMASU
電話 0997-57-2828 (中村)



せとうちちょう こにや
瀬戸内町 古仁屋 528会

くにやをわーきやと楽しもうでい !!

奄美大島で2番目に大きい港町で、古仁屋は「こにや」と読み、方言では「くにや」と言います。古仁屋港では、口を大きく開けた巨大な「クロマグロのモニュメント」がお出迎えしてくれます。

ゆったりした時間が流れる向かいの加計呂麻島や奥座敷の請島・与路島へは、「フェリーかけろま」や「定期船せとなみ」「海上タクシー」が行き交います。水中観光船では海中の美しいサンゴ礁や色とりどりの熱帯魚を鑑賞できます。また、背後にそびえる高知山や油井岳からは、大島海峡の雄大な景色がのぞめます。大島海峡では、国内最大級の「奄美シーカヤックマラソン in 加計呂麻大会」が毎年7月第1日曜日に開催されます。台風時の国際避難港としても活用されています。



コーラル橋



クロマグロのモニュメント



海上タクシー

MAP



石敢當 (せっかんとう)



中国発祥。T字路、三叉路の突き当たりに設置されており、魔物がぶつかると砕け散ると言われている魔除けの石碑。ぜひ、まちの中にいくつあるか探してみてください。

オオウナギ



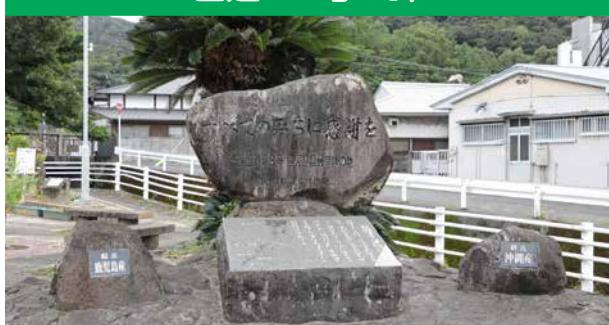
地域の方々に守られながら大きく成長したオオウナギたち。日本では主に琉球地方に生息しているウナギで最大2mになると言われています。子どもたちの散歩道にもなっています。

奄美大島要塞司令部跡



奄美大島の陸軍部隊の中心施設で、1923年に奄美大島要塞司令部が開庁しました。跡地は現在、古仁屋高校などに利用されており、司令部を囲った壁が一部残るのみです。

国道 58 号の碑



国道昇格の25年目を記念してつくられた石碑。この国道58号線は、鹿児島市～種子島～奄美大島～沖縄県を縦断しており、奄美大島ではここ古仁屋が最南端です。海上航路も国道です。

幸せの鐘



1960年生が年の祝（49歳→しじゅうくのいわい）全国同窓会を記念して建立されました。シマでは同級生のつながりが強く、特に数えの49歳の祝いは大々的に開催し、記念碑を建てたり植樹したりします。隣には、1962年生が年の祝（還暦）を記念して建てた虎口もあります。

くにやっちゅおすすめモデルコース

- 1 13:00 せとうち海の駅 集合
- 2 13:10 石敢當
- 3 13:30 オオウナギ
- 4 13:45 奄美大島
- 5 14:00 国道 58 号の碑
- 6 14:15 きゅら島交流館
- 7 15:00 幸せの鐘 解散

連絡先

koniya@setouchi-528kai.org



◀ 528会公式
Facebook





焼内湾と奄美大島最高峰湯湾岳に囲まれたケンムンの里

焼内湾と奄美大島最高峰の靈峰湯湾岳に囲まれた宇検村、その中心に位置する湯湾集落は、本村の中心地として発展を遂げて来ました。1956年から県営干拓事業が実施され、湿地帯や遠浅だった海が耕地に変わり、一部は埋め立てられ運動公園になりました。また、1992年には湖遊地埋め立てが完了し公共施設の用地や宅地として使用されています。

焼内湾の渚には二通りの様相が見られ、豊かな恵みをもたらしています。白い砂浜がある海の外側とは対照的に内側の浦内では潮が引くと、土砂の堆積した干潟が姿を現し、波静かで柔らかな遠浅の海が広がります。河川の形成した干潟は、干満の時に姿を変えながらシマの人達の生活を支えて来ました。アーゴーギと呼ばれるマングローブの林が河口に広がり、その先にコーミチ(川床の道)が蛇行して、フーガタバマ(干潟浜)に流れ海に注いでいます。

湯湾大親(ユワンフーヤ)

16世紀の初めごろ、地元の豪族と大和から下った倭寇(室町時代の海賊)の勢力と、北上した琉球勢力が三つ巴に拮抗した時代に琉球王から大島の親王に任命され、時代の象徴であったと伝えられています。

湯湾大親亡きあと、その旧宅に神子が現われて、村人がこの地を拝所として祭ったと言われており、この神子がノロ神であり、ノロ信仰が始まったと伝えられています。湯湾に在住している白井家に、湯湾大親の伝説に関する文獻が残っており、本土や地元の研修者によって解明されました。

MAP



ケンムンの館



地産地消を目的に2011年に開業したうけん市場をベースに、2022年度より施設も新たに整備され、名称もケンムンの館に変更しました。従来からの地場産品の販売はもちろん、観光窓口としての機能が追加され、人とモノと情報がプラットフォームとなっています。

水鳥の越冬地



2022年2月に実施された奄美野鳥の会主催の「湯湾干拓の探鳥会」では、31種類が確認されました。

宇検診療所・山木彦熊翁顕彰碑



山木彦熊翁は、明治41(1908)年から大正にかけて大島紬を製造し、田検集落では紬製糸工場を建てた人物です。湯湾川下流の埋立て、船着き場を作り、その功績をたたえた記念碑が建立されました。

ブラジル橋



本村は奄美で最も多くのブラジル移民を送り出しており、移民の方々の義捐金で、集落をつなぐ橋として1956年に完成しました。故郷を愛する人々の誇りと苦難の歴史を象徴するものです。

役場の高倉・宇検村役場



弥生時代に稻作が入った時から、現形状の建物が使用されたと伝承されたと言われており、奄美特有の建築物であり、元々は湯湾集落の民家で昔から高床式穀物庫として利用されていた高倉です。

ケンムン像・壁面レリーフ



奄美の民話として語られているケンムンは、魚貝類を主食とし、特に魚の目玉を好んだため、海に出た漁師が大漁で喜ぶも、どの魚も目をくり抜かれていたと言い伝えられています。しかしそんな海の幸でも、タコやシャコ貝は苦手とされています。

歴史民俗資料展示室



歴史民俗資料展示室には、12世紀後半から13世紀前半に中国南部で作られた陶磁器の遺跡か倉木崎海底遺跡をはじめ、シバサシ行事と八月踊りに関する資料や奄美のノロ祭りで使用された道具等も展示されています。

モデルコース

- 1 ケンムンの館**
- 2 水鳥の越冬地**
- 3 銀座通り**
- 4 宇検診療所・山木彦熊翁顕彰碑**
- 5 ブラジル橋**
- 6 防空壕の跡**
- 7 役場の高倉・宇検村役場**
- 8 ケンムン像・壁面レリーフ**

連絡先

宇検村観光物産協会（ケンムンの館）
☎ 0997-67-2919



すみようちょう

いち

奄美市住用町 市

NPO法人すみようヤムラランド

市(いち)集落の歴史文化に触れ、そして自然を歩こう !!

奄美市住用町市集落の内海は、天然の良港として知られ、海上交易する商取引の意味を要する「市」の名がその由来を今に忍ばせています。集落の人口動態としては高齢化が進み、特に児童生徒数も減少していることから、里親留学等を活用して学校存続や地域活性化に取り組んでいます。

集落の歴史文化には、塩炊き・黒糖作り・ソーラ（鰯）突き・氏神・城郭遺跡・オデー（御岳）祭り・住家の屋敷跡や墓地などがあり、伝説としてトビラ島伝説や海賊が隠したと言われる財宝伝説があります。荒崎展望台からは笠利崎喜界島、市集落が一望でき、集落内のサガリバナ幸縁（公園）には、「幸運が訪れる」という花言葉から白とピンクのサガリバナの苗を交互に植え、数年後はライトアップを計画。また、市集落から青久集落の頂上までの市道には、しづくが苔に落ち金色に輝いて見える「黄金のしづく」など自然観察資源が満載。ちなみに都会の人達に「観光にいらっしゃい」を島の方言で「カンコウ」と言います。



集落の全景

市集落に伝わる米搗き踊り
(奄美市無形民俗文化財)

ツアーの風景

MAP



トビラ島



市集落の目の前に集落を見守る形のトビラ島は、喜界島と市崎の真ん中にあったため、両地区で取り合ふ争いが絶えず、それぞれの女神様による招き合いの結果、今の場所に居座ったという伝説があります。

氏 神



氏神の御神体の丸い自然石は「流石伝承」を縁起とされています。また、海上交易の盛んな時に物流交易の繁栄と航海の安全を祈願したという説があります。

住家の墓



住家は17世紀から19世紀に栄えた豪族です。当時の屋敷跡もあり、墓石に使用されている加治木石や山川石は本土から運び込まれた石であることから、隆盛をうかがうことができます。

墓んしや海岸



奄美本島内で数少ない潮干狩りのできる海岸です。浜辺にはアダンの並木が続いています。

サガリバナ幸縁



サガリバナは7月から8月にかけて夜に開花します。かつては海岸線に多く自生していたサガリバナが災害などで減少していたため、集落の有志により公園が建設されました。

モデルコース

- 1 10:00 荒崎展望台 集合
- 2 10:20 トビラ島
- 3 10:50 サガリバナ幸縁
- 4 11:00 氏 神
- 5 11:30 住家の墓
- 6 12:00 墓んしや海岸 昼食(※弁当)
- 7 14:00 市集落公民館 解散

参加者の声

地域に残る歴史や文化を大切にされているのを感じました。

サガリバナ幸縁や海岸線を歩き、リフレッシュできました。

連絡先

NPO法人すみようヤムラランド
☎ 0997-69-5081 (担当:山下)



450年以上継承される伝統行事と島の田園風景が残る集落

秋名地区は、琉球王朝の時代から続く五穀豊穫を祈る国指定重要無形民俗文化財「秋名のアラセツ行事」と、奄美群島最大級の田園風景が残る地域です。秋名川と山田川の2つの川が流れこむ水源豊かな秋名には群島最大級の田園が広がり、稻作のほか「マコモダケ」の生産も行われ、絶滅危惧種の「サシバ」など、多くの野鳥が飛来する探鳥観察のメッカとしてたくさんのバードウォッチャーが訪れます。奄美群島国立公園第二種特別地域を含む長雲峠など自然豊かな山々に囲まれ、集落エリアも国立公園（普通地域）内となり、自然と人の暮らしづくりが調和した「環境文化」が観察できる地域としても活用されています。

また、かつては1,500人もの人が住む大変賑やかな集落として沖縄の那覇になぞらえ「コナハジマ」とも呼ばれ、世界三大織物「大島紬」の伝統柄である「秋名バラ」発祥の地でもあり、大島北部有数の伝統と文化色豊かな地域です。江戸末期の豪農（士族格）「麻福栄志（あさふくえいし）」が立てた珊瑚岩の「琉球石垣」や、昭和初期の遺構「奉安殿」が残ります。

MAP



ショチョガマ祭



旧暦八月の最初の丙の日に行われる「秋名のアラセツ行事」(国指定重要無形民俗文化財)の一つとして、早朝に行われる祭りです。地域の男衆が人力で組み立てた高さ約3mの櫓を、東の山に朝日が昇る頃に合わせて「ヨラ、メラ」と掛け声に合わせて揺すり倒し、五穀豊穣のお礼と予祝を行います。

平瀬マンカイ祭場



「秋名のアラセツ行事」の夕方、満潮に合わせて海の神様の国「ネリヤカナヤ」に向けて、豊作の御礼と予祝をする祭りです。神平瀬(左手)には、ノロと呼ばれる女性祭司が乗り、メラベ平瀬(右手)には、ノロの補佐役が乗り、唄を掛け合いながら祈願します。祭りの後は、浜に敷物を広げ、各家族が一重一瓶を持ち寄って楽しめます。

琉球石垣(ウントノチ)



江戸末期生まれの豪農「麻福栄志」(あさふくえいし)が建てた珊瑚岩の石垣。珊瑚は秋名湾から家人(ヤンチュ)と呼ばれる奴隸が運び、石垣は琉球から石工を呼び寄せて作られたと言われています。隙間なく積み上げる工法は、「相方積み」と呼ばれ奄美では非常に珍しい琉球独特の工法。敷地内の屋敷は個人所有のため、マナーを守って見学を。

奉安殿



旧秋名小学校跡地に残る奉安殿は、戦前に全国の学校に下賜された御真影(天皇・皇后の写真)と教育勅語の謄本を安全かつ不敬のないように収納・保管するために校庭に建てられました。奉安殿は戦後、天皇神格化の象徴としてGHQにより全国的に撤去されましたが、秋名小跡地の奉安殿は免れ、大島北部に唯一現存するものとなりました。

旧暦八月の最初の丙の日に行われる「秋名のアラセツ行事」(国指定重要無形民俗文化財)の一つとして、早朝に行われる祭りです。地域の男衆が人力で組み立てた高さ約3mの櫓を、東の山に朝日が昇る頃に合わせて「ヨラ、メラ」と掛け声に合わせて揺すり倒し、五穀豊穣のお礼と予祝を行います。

ヒゴのトイ水



ガジュマルに囲まれる幻想的な雰囲気の中、山水が流れこむ「樋(とい)」。かつては、秋名集落の里地区に住む人々の命の水として、飲み水や洗濯、お風呂など生活に不可欠な水源として共同利用されていました。今でも地域の人たちが大切に守り続けている場所です。

モデルコース

- 1 10:00 荒波のやどり 集合
- 2 10:15 ウントノチ/ヒゴのトイ水
- 3 10:40 ショチョガマ祭場
- 4 10:55 アラセツの郷
- 5 11:40 平瀬マンカイ祭場
- 6 12:00 あらば食堂
郷土料理(昼食)
- 7 13:00 荒波のやどり 解散

参加者の声

秋名集落歩きはとても感銘を受けました。
島人でも新たな魅力が満載でした。

連絡先

一般社団法人 E'more 秋名
E-Mail : info@e-akina.com
☎ 0997-58-8842



き か い ち う あ で ん 喜界町 阿伝 よんよーり喜界島

喜界島を、よんよ~り（ゆっくり）集落めぐり
波の音・樹々青し・石垣の小径～ここは阿伝～

「よんよ~り喜界島」は、7つの集落を地元出身のガイドが、よんよ~り（ゆっくり）案内するボランティアガイド組織です。

今回はサンゴ石垣の景観が魅力的な阿伝集落をご紹介します。隆起サンゴ礁の島の暮らしは、サンゴ石灰岩を素材に成り立ってきたといつても過言ではありません。特に海岸線で取れるサンゴ石灰岩は若く、結晶化の期間が短いので加工しやすく、建築材や容器、墓石、ご神体など多くの価値がありました。その代表的なものが石垣です。なかでも阿伝集落は海岸に近く、石積み用のサンゴ石灰岩は身近な存在でした。



サンゴ石垣を抜けると大海原

昔から台風のたびに海から打ち上げられる石灰岩を拾い集め、馬の背中に乗せて運んだり、大きい石は男性が2~4人で担いできて家屋の壁や屋敷囲いとして利用してきました。

やがて車社会となり、これまで積み上げた石垣も道路を拡げるために崩さなければならなくなりましたが、集落の人々は効率的に安価なブロック塀よりも先祖が苦労して積んだ石垣を再構築することを望み、今の景観が保たれてきました。



百之台より阿伝集落を望む



ガイド風景



集落を救った伝説の巨岩群



昔、この入り江で海賊船との交戦がありました。その時、島軍の戦勝を願うノロ（神女）達の祈りにより山は崩れ、転がり落ちた岩石は海まで達したといわれます。海賊船はその下敷きとなり、海岸に点在する巨岩はその名残りだと言われています。

戦前からある古道



台風常襲地帯の喜界島では、昔から台風や季節風に備え、屋敷囲いにサンゴの石垣をつくり、内側に樹々を

植え風を防いできました。人や馬が通るだけの道幅が、昔の生活風景を偲ばせています。

ふれあい公園の「岩倉市郎（いわくらいちろう）顕彰碑」



阿伝集落出身の岩倉市郎は、のちに渋沢敬三子爵の主催する「日本常民文化研究所」の所員となり、昔話の

採集や民俗学の研究で大きな功績を残した人物です。彼の遺徳をしのび、今でも来訪者が絶えません。

旧家の屋敷跡



大きな切り石で作られた立派な門構えが、往時の繁栄ぶりを物語っており、古い時代の格式

の高さを偲ばせています。広い敷地はサンゴ石灰岩で積まれた石垣で囲われていて、サンゴの島ならではの風景が見られます。

阿伝（あでん）小学校跡地に残る旧奉安殿



奉安殿は天皇・皇后の御真影（肖像写真）と教育勅語を保管する特別な建物でした。頑丈で荘厳な造りをしており、昭和の初め頃の建設といわれています。その後に起こる凄惨な戦争を経験して平和の大切さを伝えています。

モデルコース【阿伝コース】

1 スタート（公民館前看板）

2 岩倉市郎顕彰碑

3 タコの木

4 サンゴの昔道

5 初めての光景

6 ガジュマル

7 シャッターチャンス

8 ゴール（公民館前看板）

連絡先

よんよーり喜界島

☎ 0997-65-1202

（喜界島観光物産協会内）



か な ん

徳之島町 金見

一般社団法人 金見あまちゃんクラブ



まるごと国立公園！海と森と人々が共存する体験型集落

徳之島の北東部にある金見集落は緩やかな時間が流れ古風な雰囲気が漂う集落です。集落全体が国立公園の中にあり徳之島の方言では「カナン」と呼ばれています。集落を囲むように紺碧色の海が広がりダイビングスポットとして有名なトンバラ岩の背後には奄美群島に属する請島や与路島も望めます。樹齢300年のソテツが自然と作りだしたアーチ状のトンネルや、メランジ堆積物という数億年前からの地殻変動で形成された泥岩など自然と歴史を感じられる景勝地も点在し、森には国指定天然記念物のアマミノクロウサギやオカヤドカリなどの希少な動植物が暮らしています。6月下旬～7月には数十万匹のオカヤドカリの大群が産卵のために海を目指す光景が見られ、7～10月にウミガメの孵化、冬にはクジラなど季節により出会える生き物も様々です。また元気なお年寄りが多い地域としても有名で集落の高齢者クラブからは祝い事で披露される唄遊び「マンキャアシビ」の歌声や笑い声が響きます。

金見は小さな集落ですが旅館や食堂、特産品を製造する工場があり、SUP、農業体験、エコツアーなどの自然を活かしたアクティビティもご用意しております。1人でも多くの方が金見集落を知り、1人でも多くの方が好きになってくれますように。皆様のお越しをお待ちしております。



人口約 60 人の小さな集落ですが魅力満載



天然記念物オカヤドカリのナイトツアー



ジビエのシシ肉使用 あまちゃん定食

MAP



ソテツトンネル



樹齢約300年のソテツが長い時間をかけて作り出した自然のアーチです。約200メートル続くソテツトンネル

の中は異国情緒を感じられ、トンネルを抜けた先は、金見サンゴセンターと金見崎展望台へと続きます。(ソテツトンネル内の草むらにはハブがいる可能性があるので、なるべく道の真ん中を歩いてください。)

金見崎展望台



太平洋と東シナ海の二つの海が同時に見渡せ、遠くには奄美大島の島影とトンバラ岩が望めます。

眼下にはソテツトンネルが広がり、ソテツの緑と海と空の青による自然のコントラストが見事です。季節により日の出と日の入りの両方が見られる珍しい場所でもあります。公衆トイレあり。

イノー水族館



サンゴ礁に囲まれ自然にできた浅い海(サンゴ礁リーフのタ idプール)のことを徳之島の言葉で「イノー」

と言います。色鮮やかな魚たちやサンゴやナマコ、貝や海藻など多種多様な生き物が暮らし、自然が作り出した水族館のように見えることから「イノー水族館」と名付けられました。ガイドマップも販売中です。

トゥッカ



トゥッカは「メランジ堆積物」と呼ばれる数億年前からの地殻変動の繰り返しで形成された泥岩です。その空洞から

は水平線や季節によっては朝日が望め、自然が作り出す幻想的な風景はパワースポットとして親しまれています。

金見水曜クラブ



金見水曜クラブは金見で暮らす高齢者が「週に1回水曜日集まる」金見集落の高齢者サロンです。

金見集落は元気なお年寄りが多い地域

としても知られ、2015年に厚生労働省主催する「第4回健康寿命を伸ばそう!アワード」の介護予防・高齢者生活支援分野の団体部門で厚労大臣賞を受賞しました。70代~90代の元気なお年寄りが会話やパズルを楽しみ、パターゴルフや輪投げで体を動かしある墓に供える『花香』(ハナコ)を作り販売したり自発的に活動を行っています。

モデルコース

- 1 とうぐら集合
- 2 トゥッカ&ウミガメ産卵地
- 3 ソテツトンネル
- 4 金見崎展望台
- 5 とうぐら(昼食)
- 6 コーネインヤマ(水神様)
- 7 金見水曜クラブ

※季節により異なる

連絡先

一般社団法人金見あまちゃんクラブ
☎ 0997-84-9911
<https://kanan.blue/>

鹿児島環境学宣言

環境問題は21世紀最大の課題である。それは二重の意味をもっている。第1は外部にある環境の破壊であり、第2は私たちの内にあった自然に対する感性の喪失である。

環境問題は自然科学や技術文明の、あるいは政治や制度の問題である。また、芸術や市民運動、地域づくりの課題もあるだろう。しかし、より根本的には、自然の一部としてのヒトと、自然を操作する主体としての人間、この人間存在の二重性と矛盾から生じるものである。さらには私たちがいまだ、これらを刺し貫く思想と価値観を見出せないということでもある。

テーマは複雑多岐にわたって、これまでの学問的領域を軽々と超えるだろう。解決の手掛かりは机上ではなく現場にある。現場とは、すなわちそこにある自然であり、自然とともに生きてきた人間の歴史の謂である。長い時間が積み上げてきた人々の知恵を驚きとともに発掘し、現代の知性を大胆に加味して、未来への新たな関係を紡いでいくこと。解決への道筋は、現場でのそうしたねばり強い作業にこそある。

自然、環境との共生や調和に必要なもの。それは私たちを取り巻く自然、環境の回復と再生である。しかし同時に欠かせないのは私たち自身の再生である。このための試みは、科学的、論理的、かつ体系的であることが求められるだろう。ただそれ以上に大事なことは、取り戻したいきもの達への感覚と地域の暮らしどの緊張感の中で、現場に即した具体性とでもいうべきものを発見していくことにある。

私たちは、精緻な批評であるよりは、例え小さくても具体的な提案を目指す。世界と未来に向けて確かにものを提案するために、ここ鹿児島であしもとを見つめ直すことから始める。

本宣言は、2009年1月24日鹿児島大学で開催された「鹿児島環境学シンポジウム」において発表されたものです。

鹿児島大学 鹿児島環境学研究会

鹿児島環境学が目指していること

鹿児島環境学は、鹿児島大学が2008年に立ち上げた分野横断型の研究プロジェクトです。現在、自然、文化、社会などの研究に関わる教職員と行政や民間などの学外者が参画しています。私たちの活動は、「鹿児島環境学宣言」をよりどころに、



環境問題を日常から見つめ直し、解決の手がかりを現場に求め、具体的な提案を行うことを目指しています。

鹿児島環境学の取り組み

鹿児島環境学では、専門家だけでなく地元の住民の方と一緒に進めることを基本に調査研究に取り組んでいます。これまで、世界遺産への準備・機運醸成（2009-2014）、ノネコ問題（2015-2019）、奄美の環境文化（2017-）をおもなテーマとして、地元の方々とのシンポジウムやセミナーなどを重ねてきました。奄美が世界自然遺産に登録された2021年からは、モニタリング調査を住民参加で進める体制づくりに取り組んでいます。

取り組みの成果は、専門書ではなく、一般図書やパンフレットとしてとりまとめ、普及啓発を進めています。



E-mail kenkyo@kuas.kagoshima-u.ac.jp
URL <https://kagoshima-kankyogaku.jimdosite.com>

屋久島・奄美発 世界自然遺産の里と環境文化

2023年3月発行

ISBN 978-4-9913063-0-3

編 者：鹿児島大学 鹿児島環境学研究会
公益財団法人 屋久島環境文化財団
責任編集：奥山正樹・岩田治郎・坂元円香
発 行 所：株式会社トライ社